

## 〔研究ノート〕

## スタンダール伝

(その一)

金子 守

## 〔序 文〕

此の研究は〈フランス心理小説史〉という題目で講義された草稿の一部である。

今度はスタンダールの小説を研究したいと思うが、私は先述したことがあるように、学部でも大学院でもその論文はスタンダールの人間像か、その作品をテーマとしてきたので、今まで講義してきた諸作家以上に詳しく述べたいと思う。従って、これまでの如く作家の年譜という形式をとらないで伝記の形をとりたいと思う。

なお、終りでも触れることになるが、此の研究に際しては多くのスタンダール研究書を参照した。なかでも Henri Martineau の『Le Coeur de Stendhal』と小林正氏の『スタンダールの恋人たち』を大いに参考にしたり、部分的に引用したことを断っておきたい。

## 〔本 論〕

1783年1月23日、スタンダールは高等法院で弁護士をしているシェリバン・ジョゼフ・ベエールを父とし、カロリーヌ・アデライード・アンリエット・ガニョンを母として、グルノーブルに生れた。此の1783年頃と言えば、アンシャン・レジームの危機が歴然としてその様相を示し始めた時期にあた

っている。かゝる危機の直接的原因と看做さわる要因は財政の窮迫としてあらわれる。そこで、唯一の政策は上層階級に対する課税の要求となる。ブリエンヌが始めてこの政策を取りあげたが、直ちに烈しい封建反動勢力にあう。1787年2月に召集された148名の特権階級よりなる名士会は課税に対し強硬な抵抗をなしたために5月には解散させられた。かくて、ブリエンヌは1788年7月に三部会召集を公布してここにすべては政治化し、アンシャン・レジームはその最終的段階を自らはやめる。ブリエンヌの辞職にともなって、再び復職したスタール夫人の父ネッケルは9月20日に高等法院を再開したが、その直後、高等法院は三部会を〈1614年の形式により〉召集することを発表したのである。しかしながら、この声明から判断すれば、貴族階級が政治の主導権を把握したことを証明するのであるが、此の時期が封建反動のピークをなした。かくして貴族の政治攻勢が激化すればするほど、必然的に階級対立が明確になる。ここに地主的ブルジョワ属からの近代的方向をになうラインが分裂をなし、それがブルジョワ大衆属の下からのラインと結合して一つの社会勢力となり、いわゆるパトリオット派に代表されるその運動は封建的社会に対立する意義において大革命の序曲をかなでることになる。

1788年の不作とこれにともなう麦の騰貴、一方においてはイギリスとの通商条約のために流入するイギリス製の安い商品とのレースに直面して敗退するフランスの後進産業、それにともなう失業者の群、このような社会的背景にあって三部会の選挙が実施されたのである。ここに社会対立の歪は諸々にあらわれる。1789年3月から4月にかけての都市労働者、貧困農民が南部と西部の諸地方に蜂起するに至ったのである。プロヴァンス、ドフィネー、北部フランシュ・コンテに波及した農民運動を通じて、農耕では反領主的性格の運動が実力的に展開され、農民は〈安い価格での買戻しの確立〉を主張しここに始めて農民の立場が社会的に主張された。すなわち、下からの農業革命の発端である。かくて、農民と都市大衆との租税に対する反抗は絶対主義と領主制に対する決定的打撃となった。



1789年5月、遂に三部会が召集されたが第三身分の合同審理が実現されずここに第三身分は自由主義貴族、及び、ブルジョワ地主の指導下に国民議會を成立せしめ、宮廷のクーデタに対抗した。しかし、国王の兵力によるクーデタの陰謀は7月14日遂に名高いバスティーユ事件を誘発し、この事件の際の市民蜂起とそれに呼応する農民蜂起とは8月4日の封建制廃棄、及び、人権宣言の要求確立とをもたらしたのである。絶対主義はこのような経過で打倒され、一応、立憲君主制の市民社会となった。この経過はまさに重農学派の主義主張にもとづいた自由主義貴族の上からの革命であった。しかしながら、ヴェレンヌ事件以後国内では商工業ブルジョワジーのジロンド党と、プチブルジョワ、及び、一般大衆のジャコバン党との対立が開始されたとき、殆んど、同時に対外国においては革命の波及をおそれるプロシヤ、及び、オーストリアと開戦し、戦争の遂行と反革命運動の抑圧という目的に向ってパリ市民の革命的熱情の高揚は、遂に1892年の8月事件をおこさせることになり、王権を停止するに至った。その結果、第一共和制が施行されることとなった。

このような時代にスタンダール少年はどのような少年期をすごしていたのであろうか。

彼の幼少時代における姿をわれわれに示すのはスタンダールその人である。しかも、いかなる記憶も、すなわち、自己体験によるものも、人ずてのものも無駄にしていない驚くべき豊かさである。このようなことはわれわれ自身を反省すれば十分に納得がいくことである。だが、彼の記憶にも他者の証言が要求される性質を持つことは言うまでもないことであろう。殊に彼の自叙伝である『アンリ・ブリュラルの生涯』における彼の従弟ロマン・コロンの註の多々あることを注目しておこう。例え、コロンをアンリ・マルチノが無能な公証人と非難したとしても。

彼は覚えていた。よちよち歩き始めた頃のある日、母から祖母のところへ行こうとして椅子から落ち、前歯を2、3本折ったとか。また、馬にいたず

らをして蹴られてもう少しであの世に旅立つところであったと祖父を悲しませたなど。けれども、こうしたエピソードは普通の家庭に育つ幼児のありたがちな体験であった。しかし、この子供が一般の子供との距離を母の宿命におう日が近づいていたのである。スタンドールの母は1781年2月20日に23歳でやがて34歳になろうとしているシュリバン・ベエールと結婚した。子供の目に映った母の像は、約50年後自伝『アンリ・ブリュラルの生涯』のなかでスタンドール自身が次の如く告白してわれわれを驚かせている。それは異常な告白である。

《母は魅力のある女であった。私は母に恋した。多分6歳で私は母を恋したが、……その時も1828年にアルベルト・ドゥ・リュバンプレを熱愛した時も全く同じであった。》

あるいは、

《私は母を接吻でおおいたかった。着物がなければよいと思った。……私が余り熱烈に接吻を返すので母はよく逃げ出さねばならなかった。父が来て私たちの接吻がじゃまされると、私は父を憎んだ。私はいつも母の胸元に接吻したかった。……私はこのうえない罪人であった。母の魅力を熱狂的に愛していた。》

家庭に頑固な父がいると、その家は彼がない時、母子は楽しくストーブをかこむのであろうが、それにしてもわれわれはスタンドールのこの言葉をどの程度信じることができるのであろうか。むづかしい問題である。唯、母が早く亡くなったことが、ともかく、この言葉にも影を落していると言えるであろう。

1790年—此の年の11月22日のこと、7歳の少年は妹ポリースと一緒にモントルジュ街へ散歩に連れて行かれたのである。家では妹が誕生しつつあったからである。その夜、2人は祖父の家で夢に落ちていた。しかし、スタンドール少年の言葉を借りると、そのあいだにたちの悪い神様が、母をあの世の人としていた。スタンドールは母の死を追想して、

《母と共に私の幼年時代の全ての喜びは終わった。》

と、述べている。事実、その日から子供の受難が始まったのである。聖ユージ教会の死者をともらう鐘が鳴るまで子供の瞳に涙がなかった。朝になっても寝ている母を見て始めて子供は死の意味を感じたと言う。それが当然のことなのであるが、それまで悲しげな様子を見せない子供を見て、亡くなった母の妹セラフィー叔母は厳しく少年を叱ったという。こうして、セラフィーと子供は前者の死まで冷戦を続ける発端となって終ったのである。この叔母セラフィーとの葛藤に加えて、父とその意図に忠実な家庭教師が次々と皆セラフィーと組んで子供の教育に専念した。『アンリ・ブリュラルの生涯』で叔母との二、三の争いをスタンダールはわれわれに伝えている。ある日、グルノーブル選出議員であったピゾン・デュ・ガラン氏夫人のごく近くに坐っていたときのこと、夫人が彼を抱こうとした瞬間、子供は夫人の頬があまりにも赤かったので噛みついたという。直ちに叔母は化物として子供を非難した。また、他日、少年はバルコニーで燈心草をきざんで遊んでいた際に、その台所包丁を町きっての意地悪なお喋りのシュネヴァーズ夫人のそばに落してしまった。夫人は子供が私を殺そうとしてわざとやったのであると彼を責めた。こうした事情から叔母は子供を悪戯っ子ばかりでなく、心の冷淡な子供と考えていたようである。従って、スタンダール少年もいっそう彼女に反抗を示した。スタンダールの小説でもジュリアン、及び、リュシアンはこうした作者の業を課せられている。『リュシアン・ルウヴェン』の第三十七章に次の句がある。

《ベラル嬢が来た。かの女はルウヴェンを憎みきっていた。》

1788年、——此の年の5月に高等法院の権利を束縛する勅令に続いて、革命の動揺はグルノーブルにも伝わった。勅令によって法官たちがそれぞれの領地に追放されたとき、グルノーブルでは革命の動揺が頂点に達しつつあった。しかし、すべての民衆が彼等の出発に反対を表明して阻止しようとしていた。民衆の騷擾に対抗し秩序維持のために任務に着いた兵士たちは、屋根

の上に登っている反逆者たちから瓦の雨にさらされる目にあった。そして、僅かの時間であったが現実的な成功を反逆者たちはおさめた。世に〈瓦の日〉と呼ばれる日となったのである。

此の日の夕方、祖父は孫のスタンダール少年にアルゴスの掠奪の際に殺されたピリシスの死を物語って聞かせたという。と言うのもこの市街戦のさなかに子供は祖父の住居の窓から、グルネット広場から医者である祖父のところへ運ばれてくる背なかを銃剣でさされた帽子製造工を見ていたのである。その白ズボンに血に染っていた。だが、祖父の手当もむなしく絶命した。そのあいだ、手に使い古した靴を持っている老婆があらん限りの声で〈私は反抗する、私は反抗する！〉と絶叫していたのである。子供はこの様子をおっかなびっくりで眺めたであろう。このような強烈な刺戟が毎日と言ってもいいくらい感受性にとんだ子供の脳裡に一コマ、一コマ刻まれていったのである。こうした幼年時代の記憶は後年発作的に弱い者に味方する微妙な正義感の根を形成していったようである。

1788年12月20日はひどく寒い夜であった。ストーブには火がパチパチ音立てていた。会話の弾んでいるさなかに子供の近くに坐っていたバルテミードルバースは子供に顔をしかめるわざを教えて面白がらせていた。やがて、この奇妙な癖はスタンダール少年に非常に早くとりついた。大人たちを笑わせるためにやりながら自分自身も得意がって励んでしまったのであろう。結局この癖はスタンダールが息を引き取るまで彼をすてなかつた。スタンダール自身、孤独なときにはこの癖がいかに慰めてくれたことかと、幾度か語っている。同時代人のあいだにあってもかなり注意をひきつけるものであったらしい。アンリ・マルチノはアルヌウ・フレミーの言葉を証言として引用している。

《スタンダールは人をぞっとさせるしかめ面で嫌悪感を表現するのであった。そして、自分の意見と正反対の人びとを好んで嘲笑するのであった。どんな風にか道化たとんまな相手の歩きぶりを気づかれないように演じて見せ

るのであった。》

スタンダールはサロンの入場料をこうした癖で払ったと見える。

しかし、始めは幼児の阿德ケなさである筈のこの癖が、後年、皮肉漂よう審判官の姿勢と変っていったのは、母の死にあって笑う機会を、要するに自然な微笑を殆んど失ったからである。『赤と黒』でマチルドがサロンで入って来る連中に対してこの皮肉を発輝する。フレミーの言葉をただスタンダールの代りにマチルドとおき換えれば、あの描写ができあがるであろう。

1792年9月20日の革命議会は1795年2月25日の法令によって各々の郡に中央学校を設立することを決定していたのである。グルノーブルに中央学校を設立することになったとき、町の図書館設立に大いに功のあったスタンダールの祖父アンリ・ガニョン博士はその学校の教授撰択権を持つ教育3人委員会の一員であった。

1796年3月6日に教授たちは任命され8月21日に儀式があり、その席上、教授たちは紹介され正式に就任したのである。当然、席上、スタンダールの祖父も演説してかかる教育の場ができたことを讚美して次のごとく訴えている。アンリ・マルチノの『スタンダールの心』に引用されたものをレジュメしたものである。

《科学は思意を豊かにし、文学は生活の潤いを創造するものであるが、専制君主政治は学者、芸術家、及び、全教育機能の破壊を目的とする。と、誹謗し、われわれの軍隊の輝かしい成功の大部分は教養ある市民の賜であると断言して、その証拠として、気球、電信、及び、大砲火薬の進歩を挙げて、科学の急速な進歩を証明した。最後に、彼はこの中央学校がよき教育に打ちこみ、〈共和国的徳を持つ新世代〉を創造するであろう。》と、結んでいる。

スタンダールは第一回生であり、かなり成績がよく二年度生のときに数人の仲間と特別賞を貰っている。その時、彼はアベ・デュボスの『詩、及び、絵画に関する批評的考察』を得た。

この中央学校の教育目的は教授たちにさかんにイギオログに関した講義



をさせる。初代校長となったアベ・ガテールは修辞学教授デュヴワ・フォントネルや数学教授デュピュイ・ド・ヴォルドの両氏同様まったく盲目的感覚論者であったと言われている。そこで、これら3人の先生はこぞって学生にコンディヤックを説くことになったのである。コンディヤックは言う。

《理性とはわれわれの魂の働きを規律するときにとるべき態度の知識にはかならぬ。》

スタンダールはのちになって無条件で鵜呑みにしたコンディヤックの感覚論が内容が空虚で十分に本能に就いて考慮がなされていない、と、批難したが、コンディヤックその人は理性をより重んじ人間の自由の侵害者として本能を批難したからである。しかし、結局、スタンダールはコンディヤックを批難しつつも、自分の最初の間識に就いての理論的基礎理念を彼によつたことを認めざるを得なかつた。コンディヤックの小冊子が全書籍にもまして豊富な理念が述べられていたと語つたのは他ならぬスタンダールであつたのである。彼の文学に啓蒙思想を認める根本的要素がここに芽ばえているとさえ、われわれは推定することができるであろう。例え、知識の断片的記憶にとどまっていたとしても。ザルツブルグの枯枝の役割をその断片はやがて果す筈である。なぜなら、コンディヤックもほかのイデオログ同様、社会と個人とを殆んど同価値のものとして社会も個人に精神があるように、精神を持っていると考えていたのである。スタンダールは始めて知つたこの感覚をロック、カバニス、エルヴェシウス、及び、知人のトラシイ、さらにメーヌ・ドゥ・ピランの諸理論を通じて、人間認識や芸術に対する批評眼を形成したのである。

さらに、スタンダールに文学に就いての正しい知識の基礎を教導したのはデュヴワ・フォントネルであつた。彼はグルノーブル出身であつて、その幾編かの戯曲はテアトル・フランセでも上演される名声を持っていたが、余生を故郷で暮していた。中央学校は彼を修辞学の先生として迎えたのである。スタンダールの祖父同様、ヴォルテールに熱狂的に私淑していた彼は自分の

講座に外国文学を組む独創を発輝して、学生にシェイクスピアの存在を始めて教えた。そして、ハムレットの一場面を読んで聞かせたという。なお、彼は悲劇『エルシー、あるいはラ・ヴェスタル』の作者であり、此の発表時期が専制時代であったためにソルボンヌの検閲は上演することも、出版することも許下しなかったというので名高いものであったが、1790年代に上演されることになった。そして、1799年4月3日にグルノーブルでも上演された。スタンダールがこの上演をどのように観劇したかを知るよしもないが、ともかくこうした演劇風土のなかで彼はいつかはモリエールのような劇作家になってやろうと生涯にわたった野心の芽を受胎したことであろう。彼がたびたび研究対象とした四人の劇作家のなかでもシェクスピアに対してのみ殆んど終生尊敬の念をいだいていた。大叔母エリザベートの口癖〈ル・シッドのように美しい〉のkolネーユはスタンダールの浪漫的、英雄的情緒の趣好を培ったし、モリエールの喜劇を認めながらも、その理想の抵劣さにはふかくたちいる気はしなかった。ただ、女優とうまくやったことだけは尊敬した。しかし、ラシーヌになるとその人となりや、劇にもたいへん難癖をつけたりしていたが、その代り、彼は自己の精神にラシーヌ的影のあることを否認する意図にでる愚をおかさなかった。スタンダールの一生に、あるいは、小説に人生に何を求めていたかを見るならばわれわれは気がつくが、スタンダール小説の心理、及び、その描写というものがまったくラシーヌ的、すなわち愛と野心上に原則を追求していることをわれわれは知らされる。

1797年——此の年の1月9日にすでに36歳で叔母セラフィーが亡くなっている。彼はいわゆる彼の言う専制君主のひとりが消えたことを神に心から冥福を祈ったというよりもむしろ解放感から感謝の祈りをささげたのである。この家庭事情と学校へゆくことによって少年は世間なみの子供らしくなったのである。彼は好んでグルノーブルの町を散歩し、第二年度を迎える頃、かって、ガニオン叔父が連れていって見物させてくれた劇場に通う習慣をさえ持つようになった。スタンダールの母が亡くなった頃にこのガニオン叔父は

結婚して、グルノーブルを去っていたので、叔父と棧敷で殆んどふたたび会う機会を持つことはなかったが、その棧敷は幾条かの煙ただようケンケ式洋燈で貧弱に照らされていたにすぎなかった。けれども、それが子供の記憶には魅力的な場所として残っていたのである。彼がふたたび劇場に出入りするようになったとき、以前とはことなつた目と感情で舞台を眺めた筈である。と言うのは年令のためばかりでなく、その頃のスタンダールはデストウシュやフロリアンを読んでおり、今度は自分が名高い劇作家を夢みて処女作『セルムール』のプランを練っていたのである。数年前の如く棧敷でなく立ったままで平土間で観ている日が続く。そして、彼は感傷を誘う劇を好み、勿論まだ人生体験の浅い彼にアルセストのほろ苦い味がわかる筈はなく、やさしくて、愉快的なメロディのくりかえしか、感情を露呈しての長いセリフに陶醉して孤独な時間を楽しんでいたのである。こうした劇で一寸したセリフしか口にしない娘はかなり長身のやせた鋭い鼻をして可愛らしいとても姿勢のとのつた娘であった。平土間にいて彼女がその存在すら気づかない初対面の彼はなにか心に触れるものを感じていたが、何回か見物に来るごとに、彼は内気な人間がそうであるように話しかける勇氣すらなくて、ただ、いたづらに時をすごしつつもいつしか熱烈にその女優に恋し始めたのである。彼は自己のそうした姿にアダムの本能に覚めたことを知ったであろう。これが初恋となった。約三、四か月続くのである。その女優の本名はマリー・ガブリエル・ラモンと言い、1779年頃に生れてこのグルノーブルの舞台には1795年にデビューしていた。1797年の演劇シーズンである11月にスイス出身の男優と結婚してグルノーブルに3年目の舞台を迎えていた。その夫の名に従ってキュブリ・ヴィルディニーと宣伝ポスターは彼女の名を告げていた。スタンダールが始めて彼女を見たとき、キュブリ夫人はまだ19歳になったかならぬかであり、その熱烈な讃美者はやと15歳であった。あの『パルムの僧院』でファブリスが見せた大胆さなど露ぞ持ちあわせぬこの内気な少年が、一言も彼女に言葉もかけないでいるあいだに、1789年4月15日、彼女は町を去って

いったのである。その後、スタンダールは彼女と一度も会うことはなかったらしい。ただ、1805年に彼がメラニーを伴ってマルセーユに到着する寸前まで、キュブリ夫人がその地にいたらしいという消息を知ったのと、それから何年かがすぎた後、今度はハンブルグで会う機会がありそうだった。帝国の末期に彼女の夫はフランス軍隊の案内人であったのである。しかし、スタンダールがブランシュヴィックからこの港に着いたとき、彼女はまだそこに到着していなかったのである。とにかく、グルノーブルで彼女は女優であるとともに歌手をも務めていたらしい。スタンダールは彼女と彼女の歌う文句に夢中だった。ひとりになると、あのマチルドのように口ずさんでもみたであろう。彼は後年告白するが、このようにして音楽に対するもっとも高尚でもっとも高価な永続きのする趣味が彼に芽えたのである。週に二、三回も平土間で彼女の姿を眺め、声を耳にし、家へ帰っては自室にとじこもり、ただ彼女のことばかり夢想し、やがて、女とともに暮すという幻想がこうじて眼前に彼女の姿をさえ、現実の姿に捉えてはっと我にかえる夜が重なっていった。そんなある朝、彼は町の広場でいつものごとく彼女のことを考えながら散歩していると、向うから素顔の彼女がやってくるのに気がついた。先にも後にもただ一度のチャンスであったのにもかかわらず、悪鬼にでもさらわれるかのごとくスタンダールは逃亡してしまったという。冷静にかえったとき、彼は人生にはとりかえしのつかぬ後悔があることを悟ったであろう。

ところで、彼は中央学校で初めて自分の気に入った同じ年頃の友だちと交際する喜びを体験した。彼の友となったのは従弟のコロンはもとより、パラル、フォール、及び、クローゼであった。そして、最後にビジリオン兄弟が加わる。この兄弟はサン・イスミエに住んでいる両親からはなれて、シュスワーズ街に若い女中と一緒に下宿していた。多分、サン・イスミエ出身のフォールがスタンダールを彼等兄弟に紹介したのであろう。片思いに終わったキュブリ夫人が町を離れた頃に知りあった彼の新しい友だちは兄のフランソワが16歳でその妹のヴィクトリーヌは15歳、弟のレミは14歳であったと

いう。スタンダールは弟のレミより上の二人といることの方が多かった。それで、フランソワとは年頃の若者が誰でも試みる冒険ハイキングをやっている。ランシェ山に登ったとき、初めて彼は広大な地平線を発見する。フランソワは夢をむさぼる優しい心根の少年で心からスタンダールに友情を感じていたようである。われわれはこのようなフランソワに『赤と黒』におけるフッケのジュリアンに対する態度を感じることができであろう。彼の妹にスタンダールは優しさを感じていた。ときどきは恋とも言える感情を抱いたのであろうが、その感情よりも少年少女の友情の方が支配的であったらしい。彼等との交際はスタンダールに執って母の死以来失っていた子供の幸福を日々体験することになったのである。彼は当時を回想して次の如く述べている。

《その当時、私たちは百里香を食べながら森に遊ぶ仔兎のように生活していた。》

また、彼はこの学校に存学していたとき、ある事件をおこしている。しかも、彼の主張するところでは主謀者であった。祖父の家の窓下に植えてある友愛の樹に対する加害を数人の友だちと企てたのがそれである。まったく象徴的なこの加害は、当時、極めて注目を惹いた事件であったと言うことである。父やセラフィ叔母にたてつき、あるいは、革命のさなかに弱者に味方する正義の形象を心に絶えず映じていた少年がなぜ反共和国的な、しかも、計画的な行為に走ったのか、後年、彼自身、反問して答えることができなかった。しかし、彼は自分たちの行動をかなり詳細に記憶していた。

グルネット広場には自由と名づけられた二本の木があった。最初のは1792年6月22日に植えられたが虫に食われたのが原因で1796年12月のある夜倒れてしまった。二番目のは1794年の3月31日から4月6日のあいだに植えられたまだ小さな檜の木であった。最初のと区別して友愛の樹と呼ばれていた。1798年の9月22日目にひとびとはこの木の幹に次のごとく書かれた掲示板を吊したのである。

《Mort à la royauté. Constitution de l'an III.》



さて、ある日、とっぴり陽が沈むと、スタンダールを始めとし、コロソ、マント、及び、フォル三兄弟は散歩している様子をして、この樹に近寄り新体制を讃美している掲示板にピストルの弾をぶち込んだのである。次の引用文は『アンリ・ブリュラーの生涯』の第三十三章からのものである。

《われわれは冷静に約束していた。……マントに命令をした。……深い静寂だったので発射されると恐ろしい音がした。……その瞬間に見張りの兵士たちがわれわれの方へ向って来た。》

『スタンダールの心』でアンリ・マルチノはこの事件を語りながらこうした出来事がおこったのは、スタンダールの性格が大きな原因であるとしている。

《われわれはそうした彼に気づく多くの機会を持つことになる筈であるがスタンダールは一時の情にかられやすい人間であった。》

なる程、確かにわれわれはマルチノの見解のごとく、スタンダールが衝動的な性格を多くの行為で示していることは事実であるとしても、この陰謀が一時の一寸した出来心に起因していると簡単に説明しただけでは充分な納得がいかない。彼は革命の毎日、迫害された民衆の姿も、負傷して血を流していた職員の姿も、老婆の反抗も目撃したし、それに学校はスタンダールの祖父がおこなった演説を借用するまでもなく政治の影響が歴然としていた。時代、国家を問わずそこは政府の好みに合う寸法で青少年を育てる。当然、彼とても共和主義教育を受けたのである。しかるに教育にあって学校と同じく青少年に影響を持つ家庭の教育は学校とは正反対の訓育を彼に仕込み続けた筈であった。後年、アルトワ伯によってレジオン・ド・ヌール勲章を授けられる父を先頭に、セラフィ叔母や彼の家庭教師であったライアンヌ神父など、それに彼がかってあれ程熱愛した母もみな王党派であったと思われる。また、かってスタンダールの父もコロソの家族同様、革命政府によって獄舎につながれたことは事実らしい。次に述べるコロソの註にもそのことが理解される。このように彼等の家は殆んどが時の政府に反抗的なひとびとに属し

ていた事実はこちらしたとてつもない陰謀を計画した少年たちの思想がそれぞれの家族の反抗の表言としてみられると思われる。『アンリ・ブリュラールの生涯』の第三十三章に、次の文がある。

《……コロンと私ではなかったろうかと思われる位である。》

という本文に対する註でコロンは次の如く述べている。

《並木通りの門から五、六間のところで離れたのはコロンとマントである。コロンはあとが、どうなるであろうかと心配し、落ちつくのに骨がおれた。コロンの父は発射のとき、グルネット広場のある家にいたので、コロンが何かこれに関係しているのであろうと疑い、たいへん叱言を言った。父もその家族もながいあいだ監獄にいたのでこの息子の共謀は致命的なものになりうるのである。》

スタンダールが極度に父を憎んでいたことは先述した通りだが、この感情は年月の流れとともにふくらんでいった。後年、メチルドに宛てた手紙はこのことをはっきり証明している。従って、スタンダールは私人としても作家としても何事につけ自分が父と正反対であると、意識的に叙述した形跡は誰が読んでも明瞭である。それゆえ少年の彼には左（学校）、右（家庭）の両思想がどちらにも傾むいて定まることなく浮いていた。かかるスタンダールとして把握して初めてこの事件の意味が明確にされたと思う。

パリはわれわれが東京に抱く如くスタンダールに執っても憧憬の地であった。彼があこがれの首都へ出て来れたのは学校で優秀な成績、特に数学が優れていたことによる。すなわち、成績の優秀な学生はパリに行き、理工科学学校の受験を許下される制度であったのである。1798年3月30日にスタンダールは15人の仲間とともに代数、及び、円錐幾何で賞をとっている。しかし、平土間通いと、ビジリオン兄妹との交際に熱をいれていたのだから二年生の彼がそんなに勉強に励んだとは思われない。しかし、三年になると数学の研究に熱中し始めた。髪をかける時間さえおしくなると、彼は回想している。母が亡くなってから誰も入ることを許されていない部屋があったが、その部

屋を使用する許可を彼は貰った。かって母が刺繍した安楽椅子に坐ってまったく干渉のない生活をおくり、勉強に打ちこむことができた。あるとき、彼は実直ではあるが注目すべき数学の先生を知った。その男は33歳くらいでガブリエル・グロと言い、カールした髪は目のうえまでたれ、背丈は高かった。その当時の職業はクラブの演説家であり、サン・ローラン街に居住していた。心ならずも貧乏のためにときどき家庭教師をしていたのである。けれども、その教え方はスタンダールに執って忘れがたい名教師ぶりであった。彼の小説のなかの作中人物に必ず数学の先生が主人公となんらかの関係を持って登場する。『ローマにおける散歩』、及び、『赤と黒』には実名のまま、そして、『リュシアン・ルウヴェン』ではゴートィエという名を持っている。しかし、当時少年であったスタンダールにはグロ氏の真の価値を認めることができなかった。数学の教授などよりはその共和主義に対する純粋性、生活における無私無慾、及び、相手を納得せしめる話法において優れた人物であったと言われる。後年、スタンダールは彼の真価を認めたのであろう。ゴートィエの人間像はまさしく上述の通りの男として画かれている。

グロ先生のおかげで1799年の5月には他の2人の生徒と共に数学で一等賞を得ている。次いで9月に行われた試験では次の如き表賞状と賞品を得た。

《市民・ベユール、数学の解答において示した正確さと計算の際の能力とにより抽籤なくしてウーレのラテン語版を汝に与えることを決定した。》

此の試験は理工科学校受験有資格者9人によって争われたらしいと言う。1799年10月30日、理工科学校の受験のためパリに向う少年の激励をかねた送別の会が親類一同が集って開かれた。ロマン・ガニョン叔父もその席にいた。彼は心がすでにパリにとんでいるスタンダールの気持を推察してか以下のようなドン・フェンの教訓を与えている。

《お前は頭がよいと思っているし、数学もできると鼻持ちならぬ己惚をいっぱい持っているが、そんなものはなんの役にもたゝぬ。世間という奴は女の手だけで出世するものだ。しかるにお前は醜男ときている。……女にはふ

られるであろうがまごまごせずに24時間もすれば他の女に色目をつかえ、止むなくば女中にも色目を使えばよい。》

11月10日、スタンドールはとうとうパリに到着した。前日、ナポレオンはクーデタによって政治の実権を手中に収めていた。

《なんの面白くもないパリを見出して深い失望を味ったので、まったく食事もとれなかった。パリの泥土、山々のないこと、着飾り急ぎ足で私の傍を忙がしそりに通りゆくひとびとを眺めて何もすることもない私は深い悲しみを感じていた。》

と、パリの印象を語っているのであるが、スタンドール小説の主人公は作者の分身であるとは批評の定石であろうが、殊に即興作家と見られる人、すなわち、カードの人間作りに反対している作家の作品にはこの傾向が著るしい。スタンドール然りである。さしづめ現代ならアンドレ・ジッドがそうであろう。スタンドールは『バルムの僧院』にその典型を見る如く小説を即興的に完成し、それをバルザックに幾度も推敲したらと助言されても拒否している。ファブリスはスタンドールが始めてパリを眺めたときの気持ちを代弁している。すなわち、都会は地平線がないと話している。理工科学校へスタンドールが姿を見せなかったことに就いては、その理由をわれわれは彼の書いたものから直接知ることにはできないが、多分、モリエールのように女優を愛人として劇作をしながら気ままに暮らす夢の席が学校の席より自由な感じがしてならなかったのであろう。そうこうするうちに試験日がすぎて、彼はピリィアール館にとちこもって冬の寒さにふるえていた。〈明日があるさ。〉だが、待っていてくれたのは烈しい熱病であった。三週間もベッドをはなれることができなかった。ガニョン博士の可愛い孫が病気で苦しんでいるのを知ると、ノエル・ダリュは女中を看護につけてやり高名なポルタル博士に彼を診察させている。スタンドールが快方に向ったとき、自宅に引取って保養させている。

当時、ノエル・ダリュは70歳になっていた。彼はグルノーブルに生れ、ス

スタンダードの祖父と従兄弟であった。こうした関係から彼はスタンダードの面倒をみたのである。彼は先づ法律を学び、弁護士の資格を有し、グルノーブルでソフィー嬢と結婚している。その後、モンパリエに居住し、そこでランドックの監督官に任命されていたサン・プリエ伯の第一書記を30年にわたって務めている。此の時期のノエル・ダリュに就いてスタンダードが氏を語るとき、彼を元知事と呼んでいるが、それは皇帝の統治下ではブルボン朝のノエル・ダリュ氏の職が知事に相等するものであったことに由来している。王権と貴族がその領土権をめぐる争いがピークにあった1787年に彼は引退してしまった。そして、恐怖政治下に逮捕されたときはベルサーユに居住していた。しかし、ロベスピエールの失却の際、自由の身となった。執政政治下に投機が当ってリール街に邸宅を買っている。なお、彼は第二の妻シュザンヌ・ペリエとのあいだに9人の子供があった。保養のためにスタンダードがリール街に引きとられたとき、長子のピエールはスイスに駐在するマセナ軍団の監督官であった。1800年の初頭ピエールは帰ってみると見知らぬ従弟が家族の一員となっていた。時にピエールは32歳であり、スタンダードは16歳であった。ピエールはツールノン校で法学を勉強し終えると陸軍に務めた。父が逮捕されたとき息子も同じ運命をたどった。というのは、検閲に際して彼の書簡の一節に〈われわれの友イギリス人は云々〉という文句があった。ピエールとしては勿論、皮肉ったつもりであったが英軍と戦っている共和国の役人には皮肉を解する余裕がなかった。弁解も認められずとうとう牢獄にぶちこまれてしまった。しかし、程なく彼の公民としての真意が認められて復職し、今度はクロード・ペシエの部下として幾度も働く機会にめぐまれ同時に彼と階位を越えて友人となった。

このピエールの下に3人の女の子が続いている。スタンダードがこの家族に加った頃は3番目のソフィーだけが結婚していなかった。後年、一番気心の通じあう相手となったマルシャルは25歳であった。兄と同じ職を追い、その当時は雑誌を対象とする副検閲官となるころであった。スタンダードの



目にはあのロマン・ガニョンの若き日々を思い出させる快活な生活をおくっている男に見えた。もっとも時にはあのジュリアンがノベール伯に感じさせられたパリ社交界の冷たい礼儀をスタンダールも感じたにちがいがなかった。彼は羨望の気持ちも手伝ってマルシャルをモデルとしてパリ風な生活を身につけようとした。マルシャルは彼をオペラに誘ったり粋な場所に引張ったりして帝国の全期間を通じて、年令も身分も越えて友となっていたのである。ダリュ家に迎えられマルシャルとの友情の芽生えの期間にあったのにもかかわらず、スタンダールは最後までこのサロンのストーブに煙をしか感じなかった。そうした原因は社交界の礼儀にうんざりしたことにより、地方都市出身の劣等感から臆病になり、自然へまをしないかと気をくぼり無口に落ち入っていったようである。『赤と黒』にラ・モール侯のサロンで、

《ジュリアンの魂は裸であったが、烈しい屈辱的沈黙からどうしても抜け出ることはできなかった。》

と、スタンダールが書くとき、彼はかつてのダリュ家のサロンの追憶に身をおいての言葉であったであろう。ノエル・ダリュはスタンダールが理工科学校の受験もせず、こっそり絵画を習い始めたのを知って多分あきれた筈だ。とうとう、ある朝、スタンダールに厳しくこう言った。

《陸軍事務局で、あんたが私の息子と一緒に働くように取り計らうであろう。》

今や、ピエールは陸軍省所管の第一分室長の要職にあった。彼の務める大臣官邸はヴァランヌ街のかどにあり、ここでスタンダールはピエールの部下となって働くことはなったのである。以後、約14年にわたるときどきは彼の厳しい仕事の誠実さに堪えかねて反抗しつつもナポレオンの失墜まで彼の厄介になる。

此の当時の両人の邂逅から従兄弟としての親密さはあまり見られないが、それでもピエールは礼儀に厚くスタンダールを面倒見続けている。こうしたスタンダールの分身として小説に姿を求めるならば、われわれはウェールズ

大臣の部下となったリュシアンのパリに於ける勤務生活を発見するであろう。スタンダールの仕事は主として手紙の作製であったが、まもなくピエールは彼が仕上げた手紙にグルノーブル中央学校出身の秀才が〈cela〉を〈cella〉と綴っているのを発見して驚いている。此の話は『アンリ・ブリュラルの生涯』でスタンダール自身が正直に語っている事実談である。しかも嘲笑によほど自尊心を傷けられたとみえ、決してこの失敗を忘れなかった。一方、ピエールも忘れることのできないこの従弟の面影を後年回想している。王政復古下に『ローマ、ナポリ、及び、フロレンス』の著者がスタンダールであることを知ったピエールは笑いがとまらなかった。そして、次のように叫んだということである。

《ありうる事か！ あの青二歳、鯉のような馬鹿奴が！》

周知の通りピラル校長のもとをはなれてラ・モール侯の秘書となった直後ジュリアンは同じ過失をする。ここにわれわれはスタンダールの人間像に新たなノミの一振りを刻むであろう。すなわち、自虐の性格を、そして、それはスタンダールが漠然とエゴチスムと名づけた自我の本質をよく表彰していると思う。

1800年3月9日にスタンダールはダリュ家から妹ポリヌに手紙を出している。

《ポリヌ、あんたに手紙を書くこともなく5か月も我慢することができたと考えたとき、もう私は自分がわからなくなりました。すでに気がついてからさえかなりになります。ただし、興味の変化はいつも願望を満足させてくれません。まづ、あんたはかかさずに一週間毎に私に手紙を書いて下さい。そうしないと叱りますよ。次にあんたが自分の手紙や私のを誰にも見せないようにして下さい。心から書くとき束縛されたくありません。ピアノはどれほど進みましたか教えて下さい。若し、あんたがダンスを習い始められたのであれば、此の冬踊りましたか、そのような気がしますが。あんたはデッサンを始めましたか、ここに来てからは私は仕事が忙がしくて学ぶ余裕が

ありません。私はオペラの踊子とダンスを始めております。此のダンスはベ  
ェレルのそれとまったく似ていません。私はアデル・ルビュフェルと踊っ  
ています。彼女はまだ11歳ですが才能と奇智とにみちております。彼女にみ  
られるもっとも目立った特色は読書経験がたいへん豊かだと言うことです。  
それで、あんたも同じ道を撰ぶと良いと思う。なぜなら読書に優る良いもの  
はないとかいう私は信じていますので。選ばれた読書はきっとあんたが熱  
愛するほどあんたを惹きつけるでしょうし、あんたを真の哲学に導くでしょ  
う。崇高な楽しみの汲みつくせない泉こそわれわれが天才を感じ、熱愛する  
ために必要な能力、及び、魂の力を与えるものなのです。そうした力さえあ  
ればすべては容易になり困難もなくなる。すなわち、魂は飛躍し、それ以上  
に考え愛します。でも、私はあんたが知っていない言葉を口にします。あん  
たが天才を感じるうであるうと、希望していると。祖父にシャルベ書店で  
ラ・アルプの文学講義をもとめて頂きなさい。持つ必要があるし、読んでお  
く必要がある本ですからね。多分、此の作品はあんたを少々退屈にさせるか  
もしれませんが、垢抜けさせるでしょう。そして、時がたつにつれて償われ  
ることを受けあいます。また、私の文学に関するノートを捜してラ・アルプ  
であんたが読んでいる問題点を同時に私のノートで読んだら良いと思いま  
す。こうした研究は必要なものです。社交界と言う名に応じそこに入るとき  
あんたはその研究が役立つことを悟る筈です。有名な劇作ならときどき観  
に行かれたらどうです。この私は自分の趣味がさだかでないし得心していま  
すけれども。私はあんたが良い喜劇を見物されるように望みます。そうする  
と音楽に対する趣味がわき、無限の楽しみがあんたに与えられましょう。で  
もパパと一緒にでは観劇に行けないことを思い出して御覧なさい。若し、パパ  
が私の挙げた理由を感じていたら、私に執ってたいへん愉快なのですがね。  
私がグルノーブルに帰るとき、パパに話してみましょ。あんたがギリシャ  
の偉大なひとびとやプリュタルクの生涯を読むようにすすめる。もっと、あ  
んたが文学に専心すれば比類のない美しい魂、及び、天才を示したジャン・

ジャク・ルソーを仕上げたのはこの講読であったことを知るでしょう。許されるならば、あんたはラシーヌ、及び、ヴォルテールの悲劇を読める筈です。二年前に祖父が私に読んでくれたと同じ方法であんたに『ファディグ』を読んで下さるようにお願い下さい。さらに『ルイ十四世の治世』も読まれるとよいと思います。読むものが多すぎるとあんたは私に言うでしょうね。しかしね、思想的作品を読むことで人は今度は自分が考え感じることを学ぶものじゃありませんか。あらゆる場合にも同様であると、ラ・アルプも言っているものね。ではさよなら…。》

1800年、此の年ダリュ家の二人、次いでスタンダールもイタリア遠征中のナポレオンを追うのであるが、此の数年、フランスの革命の余波をおそれる各国はフランスに対して同盟して戦を挑んだのである。当時のイタリアはどんな状態であったろうか。依前としてドイツ同様小国分立の状態を続け、そのなかの独立を維持する力のない国々は絶えず時の列強を主人としなければならなかった。例えば、コルシカ島にしても13世紀絶以来ジェーヴァ市が領有してきたのであるが、18世紀半ばにフランスに譲られ、その後、一時ではあったがイギリス領となり、再びフランス領となって今日に及んでいる。パルマ公国はスペイン君主の野心のためにナポリの代償として、オーストリアの領土となる。このようにイタリアの諸国は外国君主の野心の対象となり、彼等の趣向のまま自由に交換され、まったく自主的国家の片鱗すらなかったのである。しかし、僅かの例外があった。例えば、法王の教会国家の他にヴェネツィア、先述のジェノーヴァの両都市国家とサルデニヤ王国が辛うじて独立の一応の体面を保っていたのである。殊にこれら独立の国家群の民衆は旧体制のままの現状に対して除々に革新的気運に目覚めつつあった。殊にサルデニヤはイタリアにおける唯一の新興勢力として発達し、やがて19世紀にイタリア独立運動の中心勢力となった。要するにフランス革命以前、外国勢力のイタリア支配は依前として変わらず唯スペインに代ってオーストリアの勢力が北部より中部にかけて著くその勢力を伸張した状況にあった。

しかし、18世紀末から19世紀初期にわたってのフランス革命、及び、ナポレオンの時代にあって国際的運命を甘受する。列国がフランスにおける革命に報いるために同盟して戦端を開いたとき、王をいさぐサルデニヤも一同盟国として参戦する。

しかるに同盟軍はナポレオン侵入軍の前にもろくも敗れて、北イタリアは殆んどフランスに屈服した。サルデニヤもフランスにサヴォイ、及び、ニースを割譲して退き、ローマ教皇国以下のイタリア諸国もフランスと講和してしまった。多年、独立自主を守ったヴェネツィア市もナポレオンに占領された。このようにしてフランスは北イタリアにチサルピナ、及び、リグリア共和国をおき、1797年にはオーストリアは僅かにヴェネツィア州のみを保つことができたのである。次いで翌年には、フランスは教会領に就いても干渉し法王は捕えられて、教会領はローマ共和国とあらためられたが、さらに1799年にはナポリ王国もフランスとの戦いに敗れた結果パルテノペ共和国とされてしまった。さらに3年経つとサルデニヤ王国の本領であったピエモンテ地方もフランスに併合された。以上の如くナポレオンのイタリア侵入以来イタリア各地の旧君主国は殆んど転覆して支配者であるフランス流の共和国にあらためられ、革命の趣旨にもとづく新政治が布かれるにいたるがその期間はまたたくまにすぎ、ナポレオンが皇帝となると、イタリア全土は彼の意のままに国家の改造がなされていった。すなわち、1805年には1802年のイタリア共和国を母胎にヴェネツィア州や教会領の一部とともにイタリア王国として、ナポレオン自ら王となり、養子のポーアルネーが副王となった。ただしシチリア、及び、サルデニヤの両島はフランス勢力の圏外にあったのでナポリの旧王家（ブルボン家）はシチリアに逃がれたのである。その他はリグリア共和国もフランスに併合され、また、ナポリ王国も1806年にはナポレオンの兄ジョセフが国王となった。

ナポレオンのこのような態度はもとよりフランスの利益を主としたもので必ずしもイタリア民衆のためではなかったのであるが、フランスの支配によ



って新時代の曙が訪づれ始めたことは確かである。最初イタリアの識者たちはフランス勢力の介入をもってイタリアを封建制度から解放するものとして歓迎したが、ようやくナポレオンの利己的態度が明らかになるに及んでそれにも反対せざるを得なかった。それはドイツ諸国の民衆の立場でもあったであろう。しかし、新しい国民的イタリアの誕生にはフランスのかかる支配が動機となったことは異議の余地がない。

スタンダードは5月7日すでに出発していたイタリア遠征軍の監督官ピエールとマルシャルの後を追ってディジョニを経て、ジュネーブへ赴く途中、かつて祖父がヴォルテールに私淑し、フェルネーを訪ねた気持ちをルソーを偲ぶ情に感じながら期待と不安のうちに行軍する。5月18日、遂にジュネーブに着く。

教えられて、在りし日、ルソーが住んだ古びた家を訪ねる。ロールの近くを通ったとき、モン・ル・グラン、あるいは、モン・シュール・ロールの教会の鐘がイン・インと鳴りわたり、湖の景観もまた素晴らしい荘重さを示し、幸福の波が彼の心の奥深く打ちよせる。35年後にさえこの時の景観を興奮しながら回想している。このように、スタンダードはイタリア遠征軍の一員と言うよりは気儘な一旅行者の生活姿勢を示している。勿論、始めて外国の道を歩んでいたのである。そして、彼は現実的な自己より想像的自己が生活するのを感じていた。

《私はイタリアにいる。すなわち、ルソーがヴェニスで発見したジュリエッタの国に、そして、バジール夫人の国なるピエモンテにいる。》

今、スタンダードはパール要塞を見あげる場所で味方の砲兵たちと共に釘づけにされている。11世紀以来、他の国の侵入を防ぐためにこの岩山に篋込まれた大砲はフランス軍の頭上に弾丸を破裂させていたのである。さすがのナポレオンもこの要塞が支配している本道を進軍できず、脇道をたどらざるを得なかったと言われる。

幾度かの突撃の失敗にフランス軍は夜陰に乗じて行動するより仕方がなか

ったらしい。このような戦況下にスタンドールは彼の隊のビュレルヴィエ隊長と共にこの要塞の下に多分5月30日頃到着し、そこで蚊の攻撃にさらされて野営した筈である。アンリ・ブリュラールに語らせている句がある。

《翌朝、私は顔を22か所さされて片方の眼は殆んどはれふさがった。》

遂にスタンドールの一行はアルバレード山頂を通ることになった。

《新しく十字鋏でつけられた小径の右は断崖で、その向うが要塞であった。皆は小さい台地でとまった。「ああ、狙っているな。」と大尉が言った。「射程内ですか。」と、私は彼に聞いた。「わたしの馬がすでに怯えているのに気がつかんとわ、！」と彼は気むづかしく答えた。そこには、7、8人いた。此の言葉は聖ペテロが聞いた雄どりのお告げのようであった。私はもう一度よく見廻し、いっそう危険に身をさらすために台地の崖際に近づいた。そして、彼が進み始めたとき、2、3分その辺をうろついて勇気を示してやった。これが私の始めて受けた砲火の洗礼である。これはもう一つの童貞と同じく私を悩ましていた一種の童貞であった。》

……とは35年後のスタンドールの追想である。

『アンリ・ブリュラールの生涯』の第47章ミラノの第一行に、

《春のあるおだやかな午前ミラノに入ったとき、何という春、！そして、何という土地、！》

と感動をこめて書き始めるミラノの追憶は正確には6月10日から12日であったはずである。ここで、スタンドールは生涯、最初の戦友ビュレルヴィエ大尉と別れて、マルシャルと再会する。

《彼は私と会ったのをたいへん喜んで「君は行え不明になった。か、と、皆んなは思っていたよ。」と、私に言った。「ジュネーブで馬が病んだので天気の良い日にしか出発できなかったのです。」と私は答えた。「家に案内しよう。直ぐそこだ。》

マルシャルは従弟をカザ・ダータに連れていった。

スタンドールはブレラ博物館の正面に位置した立派なカザ・カステルバル

コ内に設けられたピエール・ダリュの事務所で働くことになった。ここで彼は2、3日後のマレンゴにおける仏軍の勝利を知ったであろう。また、程なく晩餐の席に招かれてきていたと思われるアンジェラ・ピエトグルア夫人に紹介されたようである。アンジェラはスタンダールの同僚であったルイ・ジョワンビルの情婦である。スタンダールに執ってやがて嫉妬の対象となった彼は27才で上官の従弟に先輩らしく親切をつくし、いちいち綴字法を教えたと言われる。さらに彼はこの気むづかしい世間づれのしない若者を、多分、仲間の親交からアンジェラの両親にも紹介してやったものらしい。

アントニオ・ボロニイは織布商人であり、噂によると、フランス軍に衣服を供給して一商売したと言われていた。従って、彼の店にやって来る軍人たちにも愛想がよかったのである。ともかく、妻のマリアナや二人の娘の援助でコロソ・ディ・ポルタ・オリエンターレを買いとる程に儲けたのである。だから全家族がそうした取引の仲介なり、情報を与えたと思われたアンジェラの愛人ジョワンビルを殊に歓迎したのであり、スタンダールもそのおこぼれであづかったのである。このとき、アンジェラは23才で店の一使用人と7年前に結婚し、5歳になる男の子の母ではあったが、ロンバルディア風の美女であった。1837年の『バルムの僧院』のなかに理想化された彼女の容姿をサンセヴェリーナ公爵夫人像に求めることができよう。

《公爵夫人は若くて派手で小鳥のように身がるで、美貌などは彼女の魅力のうちではとるに足らない。いつも素直な心持ち、その時々感情にひたきる、この女性をほかに捜せようか。》……第六章より。

こんなアンジェラに未経験なスタンダールが一目で惹きつけられたのも無理からぬ心情であった。彼はこの頃の自己の心を11年後に再会したとき彼女に告白する。〈あなたを恋していると言えずに片思いに耽った私。〉と。しかし、このアンジェラと同時にいま一人の女性がこの時代のスタンダールに影響していると思われる。パシィエ家のひとびととの交際やダリュ兄弟のおかげでスタンダールはミラノ上流社交界に出入りすることができたと見られ、

多分、ナンシーにおけるルウヴェン少尉が仲間から妬まれたように、仲間の嫉妬を感じていたことであろう。

われわれが『恋愛論』、『ロッシーニの生涯』、『ローマ、ナポリ、フロレンス』、及び、『ナポレオン伝』の中に認められるゲラルディ伯爵夫人にスタンダールが面識を持つことになったのは、恐らくクロード・ペシエの紹介によるのであろう。この女性は19人もの子供があったと言われるフォスチノ・レチ伯の娘であった。彼女の兄弟で英雄の行動とアヴァンテールによってその名を知られた2人はフランス軍団の将軍となった。3番目はスタンダールが再びミラノに戻ったとき、彼の友となる筈である。かのアンジェラと同じくミラノ女性のなかでも際立って輝く美貌のゲラルディ伯爵夫人はブレシア伯の妻である以上に狂気じみた恋のために広くひとびとに知られた女性であった。すなわち、イタリアにあるミュラの恋人であり、パリまで彼のあとを追って行ったと言われるが、スタンダールが11年後ミラノに戻ったときは彼女はこの世のひとではなかった。スタンダールが1800年にミラノにあって妹ポリースに宛てた手紙が今日、2通発見されている。最初のものはミラノへ到着してから20日あまりが過ぎた6月29日の日付がある。

《ポリースよ、あんたが私に書いてくれた短い手紙に私はひどく気になっている。慾を言えばもう少し長い文面であつたらと思う。私のこの苦情をあんたは何時言わせまいとなさるのか私には分かりません。私がミラノにいることは知っていますね。グルノーブルの5倍ぐらいあってかなり建ち並んでいる都市です。ここにはゴシック風の教会があります。……ふと、見ると、崇高なパンテオンとは考えられないのですが、じっくり見ると、なかなかどうしてです。ドームの大きさはパンテオンの廻廊より高い。あんたがこれを認識するためには、サン・アンドレの鐘撞堂を四つ交互に集めたくらいの高さで50尺から60尺の長さの円周的廻廊を心に画いて見る必要があります。この教会は未完成ですが、多分、決して完成しないでしょう。一般的に見て内部は美しくありません。ただ、この建築に費やされた様々の仕事に思いやられ

る無限の忍耐には驚かせられます。これには6寸から40尺に及ぶ千ぐらゐの像が刻まれています。私はまだあなたに、サンベルナル峠のことを話していないのですね。いつかは何かのなかで、あるいは、イタリアへの旅のなかでこの峠に関してあなたは読むことでしょう。私があなたに言うことができる全ては、峠越の困難さはとてつもなく誇張されていると言うことでしょう。われわれは危険など一時も経験しなかったのです。私はパール要塞の前にある最も困難な山を越えました。クレーの近くのサン・ポール挾谷のそれのような両側とも峻険な崖を想像して下さい。その真中に一つの小山がありその頂上に要塞があるのです。要塞の下の谷底の真中にある一本道を敵のピストルのとどく距離で通ったのですよ。要塞から約六百米の所で、われわれはその道から離れて要塞からの絶えざる砲火のなかを山によぢ登ったのです。われわれが最も苦しませられたのは馬のことでした。砲弾の射撃音毎に5尺から6尺も飛び進むのですからね。あなたがこの描写を理解してくれたかどうか分かりませんが、この本当に驚くべき観世物にあなたを参加させたいと思います。あなたにお便りするためには充分な暇がありません。今、手紙を書いている所は素晴らしく大きな部屋です。この内部はグルネット広場の半分くらいの大きさです。ここで一週間、同じオペラが上演されています。その音楽は神々しいのですが、俳優は嫌悪すべき奴等です。全ての棧敷はわれわれがエタ・マジョールの棧敷や平土間に対してするように借用されています。イタリア人を少し知ろうとして努力していますが、まだ、少しも彼等の特色に就いて発見できずにいますが、ゆっくりやってみます。それというのも職務に多忙なので自分が望んでいるだけの充分な研究する余有がないのです。でもフランスにあっては学ぶことのできないイタリアに関する最良の観念を心得ました。2、3人のイタリア人との交際をしています。彼等の考えの聡明さには驚きます。それに、彼等の心を支配している名誉への感情にも。私に執って思いもよらなかったことは、この国の女性の魅力ある優しさです。あなたは私の言っていることを信じないかも知れません



が、しかし、ほんとにこの時期にパリへ戻ってしまうとすれば、私は絶望に落ち入るでしょう。ここでわれわれは異常な熱病に罹ります。それはわれわれをぞっとさせます。始めは氷り漬になって居ればこのような熱病なんかたいしたことはないと思っていましたが、一寸熱が下ったと思っていると、また、熱がでることに気がつきました。この長い手紙にあんたが返事をしてくれることを期待します。手紙はミラノ宛にするように。あんたの手紙が着くとき、なお、ミラノか、その近傍におれたらと願っております。

アンリ・ベユール》

先述した如く18世紀末から19世紀初頭にかけて世界情勢は激しい変化を持つ渦中にあった。その一つの中心がこのイタリアであり、それは祖国の完全独立という国民運動に発展するものであった。このような状況下に、自由、平等、博愛をかかげたフランス軍がイタリアにやってきた。当然、革命軍はイタリアのそうしたエネルギーに点火する役割を持った。此の時期、そうした点火者の一員であった筈のスタンダールにわれわれは意外なのであるが、そのような時代感覚、自分の行為に対する認識の片鱗すら、彼のイタリアにおける行動、及び、妹にあてた2、3通の手紙を通じても見出すことができない。すなわち、一般兵士となら変ることのない平凡な青年の姿しかわれわれは眺めることができない。『パルムの僧院』におけるモスカ伯の如き叡智のひととは程遠い。1811年から約10年におよんでスタンダールがイタリアに2度目の滞在をするとき、始めてモスカ伯の生みの親の面影を見せるであろう。それで、此の時期の彼はせいぜいあのナポレオンに対する憧憬しか示さぬ戦場に姿を見せるファブリスであったのである。スタンダールがフランス軍、及び、その一員である自己の行動の意義を認識するのをわれわれが発見するのは、後年の彼の著作である『イタリア絵画史』や、『パルムの僧院』においてである。

1802年1月21日以前にスタンダールはイタリアからグルノーブルに帰っていたとみられ、友だちと再会して大いにイタリア物語をなしたことであり

う。けれども、彼等それぞれの人生経験はなによりも立身出世こそが第一であると感じたものらしい。従って、フェリックス・フォール、及び、アルフォンス・ペリエとスタンダードの会話は銀行業に集中していた。スタンダードと同じく理工科学校入学を断念したフェリックス・フォールはパリでしばらく銀行勤めをしていたし、アルフォンス・ペリエも、イギリス滞在後、兄の指導のもとに銀行業務に携わっていたのである。しかし、スタンダードは親父から生活の保証さえして貰えば、パリに戻って観劇し夢想に耽けり文学活動をする以外の慾望などにはあまり熱意を示さなかったらしい。

再び、パリに向う日を教えながら、彼は故郷で始めて楽しい生活を送っている。二、三の社交界で催される舞踊会にも出入りしたが、こうした社交界にグルノーブルの主だったブルジョワたちが集っていたので、スタンダードがヴィクトリーヌ・ムウニエ嬢と再会したのもこうした舞踊会のいづれかであった筈である。ヴィクトリーヌ嬢はドフィネーの偉人の一人として注目されたジョセフ・ムウニエの娘であった。この家族の祖父はグルノーブルの大通りで羅紗商店を経営していた。ジョセフは父方の叔父リーブの司祭のお陰で、ロワリアル・ドォファン校を卒業したのであるが、彼の父は息子を店の跡取りとして商人にしようとした。しかし、ジョセフはその職業を嫌った。スタンダードの祖父はこのムウニエ家にもよく出入りし、その家族から尊敬されていた。それでガニョン博士はその家の息子ジョセフがものになることを真先に認めて、彼を指導し、彼のために骨折ってやったという。ジョセフは法律を学び弁護として法曹界に進んだ後、グルノーブル一般法廷の判事職を買って立身栄達の道を歩んだのである。

1787年に重大事件がドフィネー地方に起ったとき、(此の地方では高等法院と貴族の一部の者が第三身分と協力して、絶対王制に対する抗争を組織している。)ジョセフはこの地で重大な役割を演じ始めたのである。すなわち、1789年のエタ・ヂェネロウ(大革命前の議会)の代議士となって活躍している。十月事件後、彼が司会した国民公会に在職することを拒絶していること

が知られている。また、同志バルナーヴとも袂を分っている。1790年5月には引退していたドフィネーから亡命している。5年間に渡ってスイス、イギリス、ライン河の彼方、及び、イタリアと居住した後、遂にワイマールに定住しようとしていた。そこで、彼は妻を亡くして1人の息子と2人の娘とを残されたが、姉のヴィクトリーヌはスタンドールと同じ年であった。亡命する両親と共に彼女がグルノーブルを去ったとき2人は7歳であった。11年後の1801年10月1日、彼女は父と共にワイマールを去ってグルノーブルへ向っていた。一方、スタンドールはこの年の6月24日にナポレオンから正式に少尉に任命されていたのであるが、当代のモリエールにならうとする野心の方が強く、7月12日には『セルムール』などのプランを練っていた。しかし、年末休暇を得てグルノーブルへ帰ることになった。かくて、両者は成人して始めて互に運命が引きあわすことになった。スタンドールは彼女の兄エドゥワールとは当然友達であった。それで、エドゥワールと会う口実でその妹にしばしば会ったらしい。1802年3月4日の午後7時、彼はヴィクトリーヌ嬢がハイドンのピアノ曲を演奏するのを傍で聞きながら、自分が彼女に恋していることを覚え始める。だが、生来の臆病さから彼女と2人だけでは会話も長続きしない。否、そればかりか、後年、彼女の容姿を訊ねられても満足に答えることができなかつた程に彼女の顔をまともに見つめることはなかつたようである。ともかくルソーの『告白』や『新エロイーズ』に熱中していたスタンドールは彼女こそサン・プールの相手と信じたのである。

ジョゼフは帰仏後、第一統領ナポレオンに仕える決心をし、パリに移住したので、ヴィクトリーヌも五月初旬にパリに旅立ったと思われる。スタンドール自身が告白していることであるが、彼も彼女を追ってパリへ向うことになる。4月5日にグルノーブルを立ち、馬でエッセルに到着し叔父のロマン・ガニオン宅で4、5日滞在したあとでリヨンを経てパリに来ている。5月15日、スタンドールは雨降るモンマルトルの車寄せにたたずんで、相手に悟られずにムウニエー家がジョゼフがリール・エ・ヴィレ知事となった

ので、任地レンヌに立去るのを眺め送った。一方、ヴィクトリーヌ嬢も彼を恋していたら哀れなスタンダールを発見していたらうに。ともあれ、彼は空想によって彼のエロイズを恋し続けること3年にも及んでいる。彼は彼女の兄に対して手紙を出す。兄から妹に自分の気持が伝わることを計算してのことである。その手紙は恋の規則に型どっていた。自分を相手が尊敬するように画いてみせる。頃合を計ってヴァルモンの奸詐を用いてみる。自分は他の女に見染められ、もてて困ると書き送り相手の嫉妬にすがろうとした。あらゆる手管もヴィクトリーヌの心を動かすものではなかったので、スタンダールは父の別荘にやって来ては山々の狩猟に行き、草ぶき小屋で雨風の止むのを待ちつつ『新エロイズ』を読みながら自分のジュリーであるヴィクトリーヌの上に想いを走らすのであった。だが、現実にはいっこうはかばかしくなかった。それで、遂にはっきりと彼女の兄に自分の胸の苦しみを訴えた。

《不幸な偶然から、私の気持に答えてくれない……あるひとりの女に絶えず思い焦すというこの恐ろしい状態……》と。

だが、エドゥワールはこのサン・プールの願いにブルジョワ的打算の根情がひそんでいるのを見抜いていた。彼はスタンダールに返事をし君に妹をくれないと断ってしまった。それで、スタンダールはとうとうルソーの弟子に応しい絶望をみせて、エドゥワールに自分はまったく女が嫌いになったこと、従って純な心でものごとのただなかに魂と書物のみを友として孤独に生きるのだと書き送っている。

1804年12月9日のナポレオンの戴冠式が近づいていた。そして、スタンダールはもう3年も会うことのなかったレンヌの知事一家に会う日であった。彼はその日の会見を日記に記した。

《私はエロイズに再会した。》と。

彼はあれ程、夢想した自分のジュリーに会ったが、愛情の波に浸ることはなかった。その日、スタンダールは彼に男の自信をつけさせてくれたルビュ

フェル夫人の許からヴィクトリーヌを訪門したのであるけれども、それは月並の挨拶にすぎなかった。このようにヴィクトリーヌをエロイーズと呼んでいる程、自分の感情生活の規範をルソーに求めた。次にスタンダール自ら自分がルソーと分身なる立場から友人を意識的に批評していたことを日記から引用しておこう。1804年11月26日に書かれたものである。

《マントは『パイパイ』をまづい作だ。そして『粗忽者達』を真のコメディにあふれていると思っている。……マントには、多分、ジャン・ジャク・ルソーの感受性が少し欠けている。人は幾分気狂じみて女たちを眺める際のみあの感受性を持つものである。それに彼は余りにも理性的すぎる。》

スタンダールのルソーへの私淑はこの頃全人的絶体であった。あるいは、彼の生涯を通じてすらもいかなる先人よりルソーに自分の自我の育成習得を目指したと思われる。

《私は奇妙な熱狂の状態から抜けでたことを認めないわけにいかない。ルソーの興奮している瞬間が私に執って平常の生き方になってしまっていたのである。それを私は天才のしからしむところと思ひこんで、進んで養うように努め、それを持ちあわせない者達に哀れみを催していた。このような生き方は自分のうちに丈しまっておくべきである。さもないと私は永久に不幸なのじゃないか。》

スタンダールという人間像をかかえる見解によって何も私は全的に把握しようと望むのではないが、唯、暗夜における一条の燈台の明りの価値はあろうと思うのである。

ここで参考のため、二、三のスタンダール 研究家の 見解を 列挙してみた。その一人であるレオン・ブリュムはその著作『スタンダールとベイリスム』でスタンダールの如き人格を定義することは殆んど不可能であろうし、それに同時代人に曲解されて、後世において流行したと言えないまでも復活した作家のまれなことを念頭におけば、いかにスタンダールを簡単な方法で論じてはならないかが理解されようと指適している。そこで、彼はスタンダ



ールを次のように定義する。

《彼は極度に自負が強いと同時に疑い深い。》

なお、レオン・ブリュムはこうしたスタンダールを神学校におけるジュリアンの態度に端的に発露しているとして示唆している。

次に昭和32年の夏休みに私はF・M・アルベレスの『スタンダールの本性』を通読したのであるが、彼によるスタンダールの人格における定義は次の一句にあると思う。

《イギオログ的自我を免がれて、スタンダールが、それらと同じ年代、すなわち、1805年、1806年にかけて、本性の自発性に席を与えるより夢想的なより情愛に富んだ自我を培っている。……スタンダールという人間のこの二つの自我はきっと彼にあって神経の危機を、及び、苦悶の瞬間を喚起したのである。すなわち、絶えず一方から他方へと愛嬌のある男の本性から情熱的な本性へと走るのである。》

アランもスタンダールに関しては彼と作品を論じた『スタンダール論』がある。その第四章恋人で、

《……自己に対する自己の道徳の観念を形成するであろう。これこそ実にこの世の唯一の価値のあるものである。……しかも心のある非常に感じ易い点、彼以前の文学においては探険されなかった一点に触れる所以である。》

私はこれら見解に直接批評をしようとは思わない。スタンダールを年代順に語ってゆくことによって自然と批評することになろう。

偉大な劇作家となるために、モリエールやシェイクスピアなどの劇作の研究に励んでいた1800年の初頭はスタンダールに執って人間心理研究のより貴重な時代であった。祖父ガニョンの忠告以来、スタンダールは研究目的として人間心理を対象として書いていたのである。幾らかは人間心理の秘密と劇作の秘義を探求するためと快楽の興味も手伝ってか、自分も俳優修業を思いついた。かくてスタンダールはデュガゾンの教場でメラニー・ギベール嬢を知ったのである。もっとも彼女は娘ではなかったが、1804年12月31日の日記

で始めて彼はメラニーの名を記している。翌年の2月2日になると彼はもう彼女に魅いせられたと告白している。さらに一か月が過ぎるとわれわれは一寸した恋愛劇の見物人となれる。スタンダールはデュガソンの所へゆき、メラニーの耳許へ次のように囁いてやろうと決心していたと言う。

《僕をどう思う?》

遂に一時近く彼女は姿をスタンダールの前に見せた。早速、彼女と戯れたり抱いたりしていたが、メラニーは冷やかに礼儀正しく彼に応じた。そこで、彼はフィリップと愉快そうに振舞っていたものの心のなかでは万事窮したと穏やかでなかった。だが、授業が終った頃、彼女はスタンダールにルクサンプルグへ行きませんと誘った。しかし、公園は閉じていたので植物園へ行った。

此の同じ日、スタンダールがメラニーを知る以前にコメディ・フランセーズのスターであるデュシエヌワに惚れこんでいたし、彼女メラニーを識った今も度々訪れもしていたので、メラニーはそんなスタンダールの熱を冷却させるためか「彼女(デュシエヌワ)は《一度に3人の男が必要なの》って私に話したわ。」と、彼に告げた。

翌日の7日、スタンダールは日記に真先にこう書いた。私はメラニーの許へ行かなかった。と。なぜなら、昨日、彼の方から貴女に会いに行ってもいいかと頼みこんでいたのである。その問いにメラニーは長くは駄目ですけど来てもいいわ。と、許していたのである。彼女の憔悴が恋しさを増すと計算したのであろう。

4月8日、スタンダールは彼女に告白する。〈私はあなたと共にならば地の果てまでも〉と、ルアゾンという芸名を名乗っていたメラニー・ギベールはサン・ジャン教会区のカンで1780年1月28日に生れている。彼女は貧しい出であったが父親は善良な人であったという。しかし、彼女がスタンダールと邂逅する一年前に亡くなっている。まだ、明らかになっていないアヴァンテュールで彼女は20歳の時、女の子を生んでいる。その事件のためか

メラニーは故郷を離れて女優になる決心をしたにちがいない。

最初イポリット・クレロンの弟子となり、彼の死後はパリでもっとも名高いデュガゾンに教を乞うこととなり、ここでスタンダードとの第二のヴァンテュールを経験する。

一方、スタンダードはメラニーに就いて妹ポリーナに次の如く紹介している。

《彼女はとても美しい女でギリシャ的敵しい顔立をし、とても大きい青い瞳をしていて、しとやかな物腰をしているが、少し痩ている。》

恐らくスタンダードは彼女の美しさに惹かれたと同時にメラニーが示す純粹な感情の発露に魅惑されたであろう。栄光の恋人なる大女優の夢をむさぼる誇りが彼女を支えていたのであった。若者が美の表現をル・シッドのようにと云った祖母エリザベートから受け継いだ盲信的な美の憧憬は、美しいことと並んで偉大な魂を持つ女をしか愛することができなくなっていたのである。スタンダードは遂に妹ポリーナに〈メラニーは多くの点でロラン夫人である。〉と、さえ賛美したのである。

このように人を見て、その姿にかつての歴史上に名高い、あるいは、現実に生きる人物を仮想し、自分の相手もいつしかスタンダードに執っては仮想した同一人物に見えてくる。この飛躍をわれわれは小説の作中人物に絶えず見出す。『赤と黒』においてもジュリアンの背にレナール夫人は宰相のリシュリーを見、若いマチルドはダントンを見る。しかも例外なく彼女たちの愛の安息は男に最高の魂を見た場合にのみ起るのである。

此の時代にスタンダードは自分の言動によって得た評判にいささか得意然としていたと言われている。友人たちがこぞって彼を歓楽に飽き果てた道楽者と看做してやったからである。だが、夜独りだけになりノートに向う時、自己分析に長じつつあった彼は、自分がともすれば臆病でそれゆえに愛情深いメランコリックな魂の所有者であることを認めざるを得なかったろうと思われる。ここにスタンダードのいわゆる二重人格、すなわち、対社会の顔と

対自我の素顔が明瞭に誕生しつつあったことをわれわれは知らねばならない。このように子供ばいスタンダールが社会に対したとき、今度は一変して小説からでも借用したであろう悪役の化身となる。そして、やがてメフィストフェレスという仇名を頂戴して嬉しさを覚えたというわけである。且つ、彼はこのマスクを終生修正しようとはしなかった。如何に人生経験をそれも不幸に富んだ人生経験を通じてもこの両面のある奇怪なマスクを手放すことはしなかったのである。

彼の日記を通じて理解されるメラニーと自己との心理的葛藤劇の帰結はスタンダールの人生における決定的瞬間における決定的姿勢を導いたと言える。別な表現をすれば人間像の本格的彫刻であった。此の時代に自らノミを使って輪郭を意識的に刻み続けた。

ペンを手にして女を征服するための作戦戦略を組立てるとき、そして、計画にそって実行にあたる時、気取った風に演出することなどはスタンダールの芸ではなかったのである。従って女と真向いになると、相手にもそれとわかる無武装の新兵になってしまう。だが、それでも時々女なんて少々荒っぽく扱えばすぐ勝利を得たと仄めかして自己の臆病さを見せまいとした。

何はともあれ、彼等はおたがいに近くに住んでいた。スタンダールは一寸した小綺麗な部屋でメナール街の九番地に住んでいたし、一方、メラニーはそれでも小間使いと一緒に、ヌーブ・デ・プチ・シャン街に住んでいた。モリエールがそうであった如くメラニーという女優と関係を持ってそうであるが、彼はまだ自分が望んでいるが如き劇作家生活を送るにはまだまだ充分な劇作能力に欠けていることを熟知していたと思われる。自尊心からも父からの生活費を女まで含めて得るわけにはいかず、リュシアンに如く軍隊にまったく戻る意志のなかった彼は銀行屋になろうとした。スタンダールは最近のペリエ兄弟の成功を知っていた。また、かつては理工科学学校の学生であったマントが商人になろうとしていた。

脛かじりの彼は快適な暮しのための6000フランの年金を得るだけの金儲け

は明日にもできるだろうと呑気に考えていた。それに万一の時は1778年頃ヌヴェール・オルレアニを創立した従兄のアラル・デュプランティエに頼みこめばなんとかなろうと、独り合点していたが、結局、友人のマントと共に何かしようと相談しあった。そして、日記に次の如く書きこんでいる。

《今や財産作りを計画した。マルセーユへ1805年7月に行き、そこでマントと共に6か月働くこと、続いてそこからボルドーまで6か月、次にナントまで4か月、アンペールまでで8か月、最後にパリで親父が3万フランから4万フラン私に借してくれる。われわれはマント・ベール商会を1807年に設立することになろう。その時私は24歳というわけだ。》

1805年3月にマルセーユで舞台にたとうかしらとメラニーがスタンダードに相談を持ちかけたとき、内心しめたと思った筈だが自分もマルセーユへ行くとは彼女に告げまい。若し、彼女がそうと決心したら、私も貴女の後を追う貴女のためにパリの生活を、つまり、劇作家となるための修業を犠牲にする所存と答えるさと、ノートに記している。数日経つと、マントはスタンダードたちのプランよりはかどっていたので彼に別れに来た。しばらくすると、メラニーはスタンダードにマルセーユ出演の契約が調印され一週間後に出発すると、告げた。そこで彼はあなたと一緒にいきますと誓った。リヨンまで彼女と共に同じ道に行くことになる。グルノーブルに寄り必要な生活費や僅かな資金を得るためにリヨンでメラニーと別れなければならなかった。と、同時に彼はマントに君の働いている店で私の職も見つけてくれないかと、虫のいい依頼も忘れなかった。直ぐマントから返事が屈いた。

《今の商売で腰を落ちつけるのは困難だ。実際、ものになっていない。私も君と一緒に過ごすことはたいへん嬉しいが、しかし、私の務めている商会よりもいっそう安定した商会に就職されるようお願いする。》

だが、スタンダードは自分の野心より目下の恋に夢中になっていたもので、マントの至極当然な忠告にも耳をかさなかった。彼女のいないパリの生活など真平だと思っていた。



5月5日、スタンドールとメラニーはヌーユリイにいる彼女の娘に会いに行った。そして、8月には兩人はリヨンへ向う乗合馬車の客であった。この旅行のあいだに彼女をものにしようと望んで、かって自分が読みつつあの経験に悩んだ例の『フェリシア』を彼女に読ませようと目論んだという。しかし、彼の不治の病というべき臆病からどうにもならなかった。5月13日、とうとうリヨンに到着したが、ポール・アルブレの推測では、いまだに彼等はただの友だちに過ぎなかったとか。リヨンでメラニーと別れたスタンドールは金策のためにグルノーブルにやって来たが、父も敬愛する祖父すらもそんな彼の願いをきいてくれなかった。彼のあてにした3万フランはおろか鍰一文くれなくて、唯、ペリィエ宛の依頼状をくれただけらしい。生家の連中との議論、喧嘩の結果、すっかり参り憔悴したスタンドールは当然メラニーに対しても辛くあたっていた。メラニーからきた便りは慎み深いものであった。虫の居所がわるく生来の臆病さからくる疑心暗鬼の犠牲となった彼は彼女の手紙を読んで自分に対し冷やかで邪魔者扱いにさえしていると判断する始末だった。グルノーブルから6月20日に彼女に次の如き返事をだしている。

《恋しい友よ、私たちはまったく互に異邦人になったような気がします。私がこの悲しい土地に追放されて以来、貴女の悲しさを私に語りながら私を退屈させまいとして気配られたあの心からの感情とは別の人の如くなってしまわれた。貴女はただ一人で悲しみたいと望むのですね。私に執って貴重であり、貴女が私に約束して下さったあの小さな様々のことに就いて、貴女は何も話して下さいませんね。そうした日常のことこそ私の幸福を作りますのに、一日のそれぞれの時間に貴女は何をなさっているのかと想像しています。貴女に会いたい。貴女の部屋はどのような造作なのか知りたい。出演する日や時間はどんなですか……貴女はもう私に話す何事もないし、いやいや私に便りをしてみえるのですね。そして、間もなく便りを下さらなくなるのでしょうか。そうなれば、すべてが終るでしょう。あれほど愛したメラニーが

私に執ってもうなんでもなくなるのを願っているなんて、私を他人扱いにするなんて、ああ、あなた、この土地は私には堪えられない。貴女を知る前は身内のひとびとを愛していました。私はいつも新しい喜びを感じて彼等のもとへ参ったものです。神が私に与えてくれた妹たちの傍にいと、私が知っていたあらゆる女たちを忘れたものです。しかし、今日では彼女たちの魅力も失せて終いました。貴女は私をすっかり嫌ってしまわれた。私は無性に悲しい。貴女の手紙を受取ると半日ほど気狂みます。家中の者が私の気が変になったことを知るので。幾度となく手紙を読みかえします。何時間もよりかかったままじっとしています。この気持ちがおほかならぬ愛であると最後に気づくのです。貴女はひとりの友に語ることさえ私に話してくれません。…私が貴女と会った瞬間から貴女を愛していることを考えて下さい。貴女だけ愛していることを考えて下さい。他のひとと交際していないことを考えて下さい。貴女は私をあらゆるひとびとから独りぼっちにしまったことを考えて下さい。貴女だけが私の運命を作るのだということ。他の連中と同じように熱をあげなかったら私は幸福でしたのに。私があれほど愛した女を他人としなければならぬ日がきつと来るのでしょうか。ああ、何と哀れなことでしょう。情熱がさめていきます。何も私にはほほえみかけてくれません。未来に何んの望みもかけはしません。……始めて非難めいたことを口にしますけど、若し、貴方がド・サン・ヴィクトル氏以上に私を本当に愛していないのなら、私にはそのように思えてならないのですが、そうでしたらこの手紙を火にくべて下さい。しかし、若し、反対に貴女が私に少しでも愛や憐みの情をかけて下さるのでしたら、面白くない動機から貴女から遠く離れて私の直面している悲しみを理解して貰えず、例えしていても嘲笑するためではない連中のただなかに独りぼっちでいる私のことを考えて下さい。……》

そして、早合点の絶望に苦しみ友のプラナに毒薬をくれないかなどと仰々しい実演をしてみせたりした。そんな彼をマントがどうにか安心させた。次が彼がスタンダードに宛てた手紙の一節である。

《落ちつけよ。君は余りの幸福に気狂になっているのだ。メラニーは君を愛している。非常にだ。……私は彼女が愛していることを保証する。》

続いてメラニーから来た手紙は愛情に満ちたものであったので、やっと安堵した彼は7月22日の真夜中にヴェランスへと出発した。23日にはポリヌにブルグ・サン・アンデオルから便りを出している。それは恋しいメラニーの許へ急ぐ彼の幸福をあらわに示していた。遂に25日の夕、7時にメラニーのいるマルセーユに着いた。サント街のランベールに彼の部屋をマントが見つけて置いてくれた。愛するメラニーが二か月前から出演している劇場は鼻先にあった。しかもドアーツ隣りはメラニーの部屋であった。そこで数日後、彼は遂に彼女をものにしたという。そして、スタンダールは幼な友だちのビヂィリオンにこの喜びを報告したとか。

かくて意を決した彼は祖父に彼女との関係を告白し、この愛情の絆がどれほど強いものかを証明するために、子供の父親は実は自分であったとさえまくしたてた。妹ポリヌには子供は母親似であると語り、また、死刑となったジュリアンがレナル夫人に誓わせたように若し自分に万一のことがあれば、娘を育ててくれと誓わせたのである。

このようにしてスタンダールは始めて一人前の男の幸福を経験することとなった。ツグミー羽幾らと日記が家計簿じみたのである。

ある日のことである。われわれはスタンダールがああレダになる3人の女が半裸で水浴している版画をたいへん愛したことを知っている。悪魔の囁きが多分スタンダールの心に宿ったのであろうか。それとも推察したメラニーが進んでそうしたのであろうか。彼女はユヴォーヌ河の藤に覆われた大木の樹影で水浴したという。

彼女が出演せず、また、スタンダールと一緒に観劇しない日は、彼女にレッスンを操りかえさせたり、トラシーなどの哲学を彼女に教えたりして暮した。

スタンダールはジェロームの役を、メラニーはアリサの役を現実生活とい

う舞台上で上演し続けた。かくしてわれわれは悲劇を予想する。

この二人の愛を見守ったマントに就いてスタンダールとの関係を少し考えてみよう。後者より3歳年長のマントは1804年から5年にかけての2年間はスタンダールと最も親しい仲であった。マントはティランの出でそこには彼の身内の者が相変らず住んでいた。スタンダールもマルセーユに向けてグルノーブルを出発する日の夕方、彼の生家を訪問している。ともあれこの二年間というもの、スタンダールの日記、及び、手紙には必ずマントの名が読まれる。彼は自分が欠けていると信じている英智がマントに見られるのを羨ましく思って、そんな彼に圧倒されていた。それゆえ、マントのことをロックの名で呼んだのである。且つ自分の顔のブサイクに比べてマントはアポロの如く美男であった。スタンダールは彼に哲学者の叡智を認めてそのうえさらに情緒的性格が一見冷やかな態度の下に隠されていると判断した。なんと飾りたて奉ったことか、だが、メラニーにスペイン的魂を空想したのと同じ運命をたどりそうな予感がしよう。彼はマントと一緒に仕事を計画していた頃にポリースと彼を結婚させようと思ってさえいたのである。マントを妹に紹介している。

《彼は目だたないけれども、節操の正しい善良な男で偉大なることを好む。》

それで、マルセーユへ到着したときはこの友と一緒に仕事するのをどのように喜んでいるのかを表現できなかったほど感激したという。だが、メラニーに対する情熱が薄くなるのと平行して彼等の友情も薄れていったのである。個人的にはマントの教義主義者ぶりに参ったのと、彼に真の感受性（先述したようにルソーの感受性がないとスタンダールは思っていた。）が欠けていることを見抜いたためである。とうとう日記に彼の悪口を書くようになった。

《マントは確かに獣だ……あの獣性は極度に冷やかな心と頭から由来している。》

このようにすっかり感違ひしていたことを認めた。当時、常勝のナポレオンもイギリス海軍に制海権を握られていたので、そうした時勢にマルセーユ港でうまい儲け口などある筈はなかった。多分、彼等の計画も仕事もうまくレールにのらなかつたと思われる。そして、このことが両者の友情に溝をうがつたと思う。メラニーが舞台で成功し得なかつたことがはっきりしてくるにつれて、スタンドールは、唯、彼女が気の弱い性格の女にすぎないことを悟つた。トラシーを読みながら自分の境偶を慰め、今一度生活を変えなければ身の破滅だとかたくなに思い込んでいった。だが友人クローゼの忠告を受け入れて心ではすでに捨てた女と共に日々暮している状態を続けていた。しかし、やがて友の忠告も我儘な男がはねつける日が来るであろう。共に不成功であったことが両者の不和をいっそう高めた。メラニーはパリへの道を再びとらざるを得なくなり、自分の将来がどうなるか心細くなる。そして、多くのことを約束してくれたスタンドールに完全に頼っていいのか不安になった。しかし、内気な彼女には確かめるなどということが土壇場までできない。遂に明日は出発しなければならなくなつた日、さすがの彼女も決心した。ところがスタンドールはいざとなつても曖昧な態度しか示さなかつた。メラニーは一座解散のために次の職場を求めて1806年3月1日、スタンドールへの心を残してマルセーユを離れた。その時、彼女の方は愛人がすでに自分から離れていることを確かめてはなかつた。マルセーユからの便りは一向にない。辛抱を重ねた彼女も決断を迫られる。1806年8月10日、我儘でなくなつてか次の如くスタンドールを糾問している。

《六週間になりますわ。頭が重くて、メランコリックな時を避けるのとて、明日返事を書こう、いや、明後日にしようかと、おっしゃいましたのね。よう御座居ます。お急ぎになる必要はありませんわ。でもそんな言い逃れの小細工をされるより、卒直に振舞つて頂いた方がよっぽど有難いと思ひますわ。あなたはそんな小細工をなさつてお好きにだけ御返事をうまく避けることは出来ますが、私はそう何時までもほつてはおかれませんよ。



私がお訊きしたいのは次の通りです。

一、私がこの細腕で、あなたのお家からの仕送りに足し前出来る場合はあなたは御出世の希望を犠牲にしても、この私を愛して下さるかどうか御立身のお望みをお捨てになるかどちらかにしなければならない場合にですよ。

二、私たちの中、一方が他方の境遇に完全に従い、今後お互いに別れて暮すことにならないようにするためにはどちらの方が安定した境遇にあるかを調べること。

三、あなたが弱気で、それとも、私を余り愛して下さらないで私を捨ててあなたのお家の御意志に従うのか、それとも、あなたの大望のプランに従うのかどうか。

四、私と一緒に生活し、どう言うことが起ろうとも御自身の生活を円満のために一切犠牲にして下さる御意向なのかどうか、その点をよくお考えになって、それが確かにあなたの絶体不動の覚悟かどうかを誠実な人間として言って下さるお積りなのか、そうでないとすれば、その逆のことを正直に打ち明けて下さるお積りなのか。

その点をはっきりして頂けなければ安心できません。私は心からの愛情を捧げ、あなたを想う気持ちが限りなく深いことのあかしを立てます。いいえそれ所か、すでに疑う余地のない証拠を差上げたではありませんか。それに対してあなたは曖昧なお手紙を下さり、私を愛する気持ちに変わりないとか、二週間後に必ず私の許に来て下さるから、私自身で納得がいくだろうなどとおっしゃる。その意見は私を可愛がって下さったり、色々と恨みごとをおっしゃったり、私に会えて嬉しいとかいうことなのでしょう。成程、あなたのお考えではそれだけでも大したことだと思いでしょうが、私に執ってそんなことはなんでもありません。殊にあなたの今までの態度を考え、また、あなたの性格を思いあわせるとそれはなんでもないことです。そんなことで私の望む通りに愛して下さるなどとは納得できません。私は私の望む通りに愛して頂かねば仕合せになれませんし、満足できないのですから。そう言う

わけでもう少し卒直におっしゃって頂きたいと思ったのです。…》

（此の引用文は小林正著『スタンダールとその恋人たち』による。）

あなたのために家族も捨てたと言った同じ口から、家族のために自分の野心のためにあなたを犠牲にしなければならなくなったと言い聞かせた時、メラニーは自らナポリへ旅立ったとかいう。

恋人を失ったのち、自分の心をくまなく調査する。自分が計画通り行動するのを脆い感受性が邪魔だてるからである。そうした弱さがスタンダールにあっては独特の義務意識の発生となる。どんな人でもそうではあろうが彼は極端である。スタンダール小説の主人公たちもすべて作者の宿命と言うべきこの呪われた性格を持ち続ける。彼の小説の秘密がここにある。彼の小説が19世紀後期に甦ったのもこの宿命に喘ぐ呼吸がそのままわれわれのものともなるからに他ならないのである。かかる小説に感動し、さらにその深奥に感興を求めようとわれわれは作者を知りたい要求を持つ、そして、今、われわれはスタンダールその人が自分を必死に求めている姿勢に触れつつある。

《この私はメラノリックな瘦た女で、且つ女優から愛されたいと熱中した。そして、その通りになっていたが幸福なぞ長続きするものでないと思った。幸福が長続きするなどと言うのは空想であり、今の私の立場からでは望ましい幸せなど引き出せやしない。事実、今、私が望んでいることがさっぱりなのだ。…》

プロンヤ戦役が始まると、スタンダールはあれほど嫌った筈の味もない軍務に復職する。すなわち、マルシャン・ダリュに同行していた。但し、かつぎや部隊である。このようにして六、七年間にわたって未来の小説家は、全隊にその足でナポレオン叙事詩を確かめることになる。スタンダールのこの体験をバルザックは羨ましく思うことだろう。

1809年4月12日にはライン河を渡ってウインに向う車上の人であった。相変わらず彼が魅力を感じるの異国の景観であった。

《この景色は私を魅惑します。生きている甲斐があると言うものです。》

そして、次々とランバッハやエーベルスベルグを駆けながら横切った。この最後の町たるや激戦の跡が生々しく散らかっていた。否応なくスタンダールは戦争の悲惨を眼前にした。

《橋を渡るときにわれわれは人間や馬の死体を目の前にした。それらの死体をまとめて川に投げ込まねばならなかった。……車輪が半ば焼けた体の臓腑を押しだすのを眺めて吐きたくなかった。それで、このぞっとする光景から気をそらすために私は喋り始めた。それを見て私を冷淡な男と人は考えた。》

終生、彼はこの悲惨な状景を忘れることができないであろう。仲間たちが死んでいる奴に手を触れている場面が目先にちらつこう。ワーテルロー戦でこの仲間の役をファブリスは演じさせられるであろう。スタンダールが5月13日にウィンに到着したとき、ウィン、及び、この近辺の監督官に任命されたばかりのマルシャルは兄貴にスタンダールを自分の方にくれないか、と、頼んでやった。勿論、スララ氏に困っていたピエールはこの願いを承知している。

1809年10月21日にスタンダールはピエール・ダリュ伯爵夫人と行を共にした。此の時の彼は感動に捉われることなしには、そして、同時に臆病にとりつかれることなしには夫人と会っておれなかった。異国で自分のよく識っている女に会ったことが第一嬉しかったのであろう。ピエールは職務に忠実で妻と連れだって散策を楽しむ余暇など持たなかったにちがいない。一日四時間しか休むことをしなかったナポレオンに高く評価されていただけに彼も仕事の虫たらざるを得なかった。彼女の相手となったのはスタンダールであった。しかし、夫人は宿命がそうさせた相手に親切は示すもののそれ以上の感情を示すようなことはなかった。一方、スタンダールはブランシュヴィックで夫人との束の間の邂逅以来夫人を思うことなしに暮せなくなっていた。

此の頃も余暇を見つけると、彼はルソーへの巡礼を怠っていない。勿論、エムノンヴィルへも秘かに愛している夫人と一緒にいる。

《この感じ易い人が数年間埋葬されたこの島は雄大さとか、感動的なもの

とか、心やさしい尊大さとか言ったものがすっかり欠けている。これらのものこそ、若し、此の島がルソーの遺骨に応しくあらうとすれば、現れていなければならないのに。……」

こうした感情に刺戟されていたので夫人をいっそうのこと魅力ある肖像として飾りたてたばかりか、きっと夫人の方も人に告白できない感情を自分に抱いているのではないかと、自問自答してさまざまな兆を追想しては希望を高めてゆくのである。しかしながら、夫人の前に出ると自分の意志は空しく消えてしまう。呆然としてとりつくろうとすれば、なおのこと、滑稽な自分の姿を愛する女の前でさらすだけである。リュシアンはシャトレール夫人に誤解されて、もう少しで馬鹿者と看做されてしまうところであった。

空しく男爵になろうと努力していた期間、スタンドールは生涯始めて充実した社会的地位にいる自分を、見事な彫刻で飾られ美しくさっぱりとしていて気品のある部屋に見出すのであった。彼の虚栄にはただその部屋に生きた飾りものだけが欠けていた。今度は女優の代りに歌手の情婦を持ったとしても驚きにもなるまい。ベレイテルは可愛らしい娘で、彼女は1809年以来イタリア座でオペラ・ブッフの第二か第三歌手を務めていた。イタリア座はオデオンの当時新装なったホールで月火木と上演していた。スタンドールが彼女に目をつけたとき、この歌手はエンキエ街の三十六番地に住んでいた。1811年1月29日のデートでベレイテルは愛人のアパートで同棲すると首肯した。しかし、スタンドールは自叙伝『アンリ・ブリュラールの生涯』で一生を回想したときもいわゆる勝利を得なかった女性の名さえも恋しく書き込んでいるのにこの娘の名の前に、はっきりと私が愛しもしなかったと註をしたのであった。

次のことがスタンドールの才能の基礎を培ったと私は思うが、彼は自己反省から逃避するために気晴しを他に求める種類の人間には属さなかった。反対に彼は意識して自己の感情を徹底的に考察することに全力を尽くして飽くことがなかった。退屈するとき、結局は追憶に耽けるのであるが、そんな

精神状態にあるとき彼はひしひしと我が身の孤独にさいなまれる姿を、苦悩する我を発見するのである。人懐しがり屋である彼に執って仲間の存在やサロンの奇智に富んだ会話が彼の真の食糧であった。こうしたものが欠けると、メランコリックな心の秘かな楽しみである不幸な恋、そして、この異様なとも言える姿勢にあるとき作家としての素質は育ったと言えよう。こうした孤独に落ち入っていた期間にも彼の演劇熱は冷めることはなくかえって増したのである。此の頃、上演されていたフィガロの結婚のサザンナを演じているマルス嬢にスタンダールはかつて経験することのなかった美の強烈な感情を覚えたのであり、このオペラはいっそう彼の創作意欲を刺戟し劇作家としての野心を高める。そして、彼は『ルテリユ』に筆を走らす。あるいは、新哲学などと称して人間情念の方法論的類型の研究に没頭していた。

ナポレオンの部下として主計官という定職を持った彼にダリュエ家は結婚を進めた。すでにウィンでマルシャルはスタンダールに進めてみたが失敗している。続いてダリュエ兄弟の姪ル・ブラン、及び、友フォールのフィアンセの妹との結婚を考えてみたらしいが、誰とも結婚しなかった。恐らく彼女たちに愛を感じていなかったのであろう。実際、彼は恋していたので自己の感情を他の水門からも流す器用など持ちあわすことができかねたのであろう。殊にウィンであの別れの抱擁を体験したスタンダールの心には絶えずダリュエ伯爵夫人の面影が浮んでいた。パリでは毎日のように夫人に会っていた。遂にスタンダールに執ってそれが幸せにせよ、不幸な兆にせよ皆その顕現は彼女ゆえであった。夫人の一寸した微笑であっても彼に執ってはその日が幸福に満ちた一日となる。

ある日、スタンダールは妹ポリヌに告白する。

《女王に恋している延臣を想像して御覧なさい。そうすれば、あんたはこの恋人たちの危険と楽しみの様相を知るだろう。》

さりとして、われわれはこの手紙から独断的な早合点をするスタンダールとのみ観察すべきかどうか決定しかねるのである。友情を示す彼女の眼差はと



かく彼にはもう愛のそれとなる。義理の従姉としての抱擁は抑制しがたい情熱の不慎心な告白と思えた。遂に〈われわれの目は語り会った。〉とさえ書いた。シャトレール夫人とリュシアンを思い出させる言葉であろう。彼女のしているその場でジュリアンの如く彼女が脱いだばかりの手袋を愛撫するのである。こうして熱烈にして臆病な恋の災が発火していった。それにしてもスタンドールのパルフィ（伯爵夫人にスタンドールがつけた呼び名）に対する仕草や心情は彼の愛の根本原理である。よく相手を飾る。すなわち、結晶作用というものは自己の時間や空間を破壊する異常な世界に相手をも住まわせる神秘的な底なし沼である。1811年6月3日の日記を引用しておこう。

《……彼女は私とジュニイとの結婚に就いて私に語っていたと思う。その結婚が私の不幸となるとは申しませんが、と、私は彼女に答え続けた。すなわち、《あなたは私に友情しか感じておられないが、この私ときたら夢中であなたを愛しているのです。》この言葉を口にしたが私は動揺していた。この争いのあいだ中、われわれは互いに腕を組んでいた。この瞬間、彼女の手を取り、しっかりと握った。私はその手に接吻しさえした。彼女は私がそんな風に考えるべきじゃないし、彼女に私に対して友情を持っている一人の従姉のみを見るべきであると私に答えた。十八か月以来、私は彼女を愛していたのですとさらに答えた。》

ところでスタンドールと彼女との関係はどの程度であったのであろう。この引用文に彼女自身が答えた単なる従姉としての友情のみであったらうか。愛の限界が問題となろうし、それは微妙であり、自分が愛した実感のみが基準となろう。スタンドールはベレイテルと肉体関係を続けたが、彼自身告白している如く少しも愛していなかった。ともかく1815年1月6日に夫人がパリで亡くなったことを知ったスタンドールはイタリアに滞在していたがすっかり取り乱して悲しみにくれたと言う。さらにスタンドール自身が数えた九番目の恋人クレマンティヌの彼をととても冷淡だときめつけている手紙の一節に次の句がある。クレマンティヌはダリュ伯爵夫人と友の関係にあって

た。

《……あの亡くなったアレク（サンドリーヌ）（＝ダリュ伯爵夫人）さん以上に求めることができるのでしょうか。あの方が苦しみ始めると、あなたはさっさと捨ててお終いになさったのね。……》

私はやはり兩人がつつましく愛しあっていたと思う。しかし、いわゆる情を通じていたという意味は保留したいと思う。

1811年8月、フランスを離れるに先立ってパルフィに別れの挨拶にゆき、彼女に私はきっと冷静になって戻って来ますと誓った。10日間のミラノへの秘密の使者として168フランの報酬を受け取った。その目的がなんであったかは明らかになっていない。それは、多分、『赤と黒』におけるジュリアンのあの密使のヒントとなろう。だが、彼には別の目的があった。9月7日の夕方、ミラノに到着している。降りたったスタンダードはこの町を眺めて恍惚とする。早速、スカラ座にかけつける。懐しさが烈しい感動を呼び頼には涙が伝う。『パルムの僧院』でモスカ伯がこの役を再演する。青春時代の追憶が一步毎に走馬燈の如く髣髴と眼前の光景とかさなりあう。1811年9月8日の日記には次の如く記されている。

《私の心は満ち溢れている。昨夕と今日、私は甘美に満ちた感情を味った。泣きたい程である。アンジェラに対する千々の空想にとりつかれていた私は彼女から愛されて貰えず、（彼女はルイ・ジョワンヴィルに愛されていたのであるが。）何時の日か大佐かダリュ伯の部下のそれよりは何か優れた出世をして、再び、戻って来ようと心に画いていた。そして、その時こそ彼女を抱擁し泣きくずれようと決心していた。11年なんという言葉であろう。私の思い出は少しも薄れはしなかった。それらの記憶は烈しい恋心で活気づけられた。何かを再び認めることなくしては私は一步たりとミラノへ入ることができない。11年前、彼女が住む町にあるがゆえに何かを私は愛していたのである。》

スタンダードは少尉時代の胸中の女、かのアンジェラと再会する。彼の感

情はかつての11年前の憶病さに、メラニーやベレイテルとの経験にもかゝらず、相変らずとらわれている。アンジェラは訪問客であるフランス人が最初誰であったか見当もつかなかったという。そこで、スタンドールは11年前の舞台を再演しなければならなかった。かつての彼女の愛人ジョワンヴィルのシルエットを出す必要があった。やっと彼女は当時美少年ならざる中国人と渾名された太ちよの青二才が自分のサロンに来ていたことを思いだした。ツヴァイクの毒舌を引用するなら脚をがくがくさせつつあなたに恋してましたと告白する。聞き終ったアンジェラはいとも無造作に、

《その当時、なぜ、私にそうおっしゃらなかったの。》

と答えている。こうした会話に始まった再会は彼に微笑むだろう。アンジェラは自分に魅いせられた男たちを鵜匠の如く操作する術を心得ていた悪女であった。

しかし、11年に渡る結晶作用の力は偉大であり、メラニーにおけるほど幻滅は早く訪れないだろう。

スタンドールはこのミラノからも妹の教育に心掛ける。9月10日とある日付の手紙に恋心で乱れた、そして、ポリーナに執っては非常に迷惑な吐言が見られる。

《M. Z (ダリュ伯) が私にパリを離れても良いと許下してくれた。昔の友に会いに来たのです。また、ローマ、ナポリを見物に参ったのです。ミラノにとっても懐かしい記憶を見ます。ここで青春の初期を過したのですからね。こここそ最も愛している町です。それに私の性格が形成されたのもこの地です。毎日、自分の心にイタリア人の魂をあゝ毒殺者に似た心を見つけてます。最もフランス人たちはこのイタリア魂を不当に非難しますね。しかし、快活な音楽、非常に解放的な風俗、及び、平和裸に生活を楽しむ技術などに対するこの熱狂的執着はミラノ人の性格でしょう。あんたは私の取り乱したわけの分らない言葉を笑うでしょうね。でもこれもあんたのために他ならないと思うのですよ。

この手紙をバリ経由にします。消印が私の居所を知らせてはなりませんからね。この手紙を焼くように。内容に就いては他言しないように。》

この手紙でスタンダールは自己の性格が形成されたのはここ、すなわち、イタリアであると述べているが、やがてパリ、イタリアと幾度もアルプス越えをする筈である。われわれは恐らくスタンダール自身始めは意識していなかったにせよ、やがては意識して人間認識を深めた筈であり、創作活動に執って必要であった彼の作品に眺められる諸々の作中人物の群が異国の地で受胎したと見る。スタンダールはイタリアの恋人たちや友人によって人間情熱を悟ったのである。

此の9月の毎日、あのモスカ伯の如くスカラ座で観劇するよりもむしろアンジェラの栈敷が気になっていた。だが愛する女から軽蔑されることを怖れて大胆になれず隅の席でじっと動かずにいる晩が続いたとか。一方、アンジェラは多分コケットからであろうが、彼のお弟子となること位たいへんやさしいことであったのだろう。彼女はスタンダールの最も尊敬している哲学者エルヴェシウスに就いて語りさえした。もうスタンダールは嬉しくてたまらない。事実、ミラノでは彼女のみが恋の対象であった。彼は自分の熱情あふれる恋心が真物であると断言するが彼女は彼の誠実さを疑う素振りを示すだけであった。しかし、彼の誠実さが真実であることを除々に認めている。やがてのこと彼女は感極まって泣きスタンダールを〈あなた〉と呼んだという。メラニーの場合に眺められた躊躇がまたわれわれを苛だたせる。11年間もこのアンジェラを想い続け勝利を収めることを願っていた彼が、一方では勝利を得るのはいいが愛を殺して終うのではないかと不安になる。彼の気持はダリュ伯から得た許可の期限がせまるにつれてたかぶっていた。とうとう、1811年9月21日の午前11時に非常に長い勝負に結着があった。彼女が降参すると、その直後の12時にはミラノを離れた。丸2日間かかってポローニユにやって来た。約10年後、後世『メチルド物語』と題された私小説の地名である。次にフロレンスを経てローマに着き、自分の最も良き保護者である

マルシャルを訪ねている。キイリナルに住んでいたマルシャルは従弟にここに落ち着くように願ったらしいが、この大きな宮殿の生活のかたぐるしさを危んだスタンダールは完全な自由を欲してマルシャルの親切を断った。しかしながら、スタンダールはナポリからの帰途彼の所に立寄ることを約束した。職務上からマルシャルはローマの美化に大きな役割を果していたので、芸術家たちと面識があった。スタンダールは約束を守ってナポリからの帰りマルシャルを訪ねた。マルシャルは従弟をイタリアの芸術家たちのなかでも有名なカーバ宅に連れていったり、また、最上の社交界に君臨するラント公爵夫人に彼を紹介したりした。もっともスタンダールがマルシャルのこうした親切に気づいたのはこの時から20有余年が過ぎてからであった。それは『アンリ・ブリュラーの生涯』で、

《私をもっとマルシャルに感謝すべきであったのだ。》

と、回想しているからである。

そこでは素晴らしい音楽会が催されていた。スタンダールは帰り道、ラント公爵夫人は7人の愛人を持っていると手帳に書きこんだ。彼はパリを出発する際、僅かの暇しか貰ってきていなかったためにローマの美をマラソンのランナーが移り変わる景色を眺めるように観賞していた。ラファエルの住居を訪ねたときは妹ポリヌに宛てた手紙でこの住居を観るためなら自分の下着を売ってもいいと、書き送っている。このようにローマに5日間、ナポリで6日間すごした。ナポリでは友のルイ・ドゥ・バラールやマルセーユでマントの代りに仲よくなったレオン・ランベールと再会している。彼等は連れだつて町を散歩し、ボンベイまで遠出している。実の所、彼はこの町で音楽が聞けるのを期待していたが、シーズン外れであった。そこで専ら自分自身の教養を高めることに励んでいる。ナポリ生れの作曲家たちを扱った本を手に入れそれを要約していた。やがてハイドン研究で役立つであろう。

1811年10月22日、丸1ヶ月不在の後、すっかり日が暮れてからアンジェラの町に帰った。その2、3日前、アンジェラはラ・マドオナ・デル・モント



へ向っていた。翌日、彼は早速そこへ行った。途中の景色は荘重でロンバルディア平原と六つの湖を展望することができるけれども、恋に夢中になっているスタンダードはこの素晴らしい景観に目をとめもしなかった。彼女の滞在している館にゆくためには道程の三分の二の地点で馬から降りなければならなかった。その途中で彼は彼女の夫にばったり出会ったという。やっ、アンジェラの前に現われるのであったが、激情に我を忘れてはしたなく振舞ってしまったらしい。心に溢れでる感情をうまく表現できなかったのである。アンジェラの方ではよもや彼がこんな場所まで会いに来るとは思わなかっただけに露骨に怒りを示してなじった。私に過去の姿だけを見て私を危険に落し入れると言って彼を非難した、このような状況を胡魔化すために、彼女を追って来たという印象を残さないためにも直ちに出発し、ポロメ島見物に行行ってらっしゃいと叱られた。スタンダードはおとなしく承知して従ったと言われる。2日たって戻ったとき彼女はもう怒っていないようだった。アンジェラはそんなスタンダードの態度に同情してか真夜中の逢引を約束した。だが、実行しなかった。夜が白むまで彼は指定の場所で待っていたとか。

10月28日、傷心の彼は未練を残してミラノへ戻った。しばらくしてどんな風の吹きまわしかアンジェラは、私はあなたに前よりもいっそう魅力を感じています。と、打明けた。そればかりか彼女はあなたのためには家族も義務も犠牲にして一緒に駆落してもいいと提案して彼を安心させた。彼はフォルに頼み休暇を延長してもらいアンジェラの傍にとどまった。しかし、彼女は少しばかり執こくなったスタンダードに嫌気がさしてきていた。そのためか、ミラノを去ってヴェニスへの短い旅に出なさいなどと、申し渡した。そうすれば、夫に新しい疑惑の種をいだかせなくても済みますわ。と、彼を説得したが今度は承知しなかった。ドームからさほど離れていない所に小さな部屋を借りて、恋人にも自分にも気軽に使用できるようにしていた。逢引のあいだにスタンダードはランツィの『イタリア絵画史』を読んでいた。そして、仏謁しようと決心したが数章やっただけで根負けして止めてしまった。

休暇がすぎてとうとう職務に戻る決心をした彼は11月13日、ミラノを去り故郷グルノーブルに向った。まだ見知らぬ土地であるティエランに滞在していた妹ポリヌと会うためでもあった。久しくポリヌに会ってもいなかったし、彼女に会う約束をしてもいたからである。1807年の末に彼女の夫であるペリィエ・ラグランジュがこの領地を獲得していた。此の時の生活が『赤と黒』の田園生活の描写に役立つであろう。そこで数日すごした後で彼はグルノーブルにも寄った。祖父はもう82歳の高齢で久しぶりに会った彼を抱擁するのがやっとだった。ここにもわれわれは『赤と黒』、及び、『パルムの僧院』の両主人公と彼等の運命を予告する司祭シェラン、及び、ブラネス両老人との愛弟子の最後の会見を観る。

1811年の11月27日、5時半にパリへ戻った。スタンダールのイタリア旅行がダリュ伯によって企だてられた秘密のものであった。世間の連中にはドフィネーの家族の許で休息することになっていたのである。だが、述べてきた通り彼の行動は恋のために盲目になっていたのでまったく目茶だった。あきれた保護者たちはさすがに彼を許しはしなかった。が、彼は彼で自分の奉仕は勲章ものだと思っていた。さすがのダリュ伯も怒ってスタンダールに幾週間もそうした感情を隠しはしなかったのであるが、やっとエヂェリ夫人の好意で1812年2月7日にグルネル街で催された晩餐会に招待された時、ダリュ伯と仲直りしている。

ミラノへ出発する際、約束した如くパルフィに対する愛情はアンジェラを得たせいとか友情と変りつつあった。クレマンチーヌの言葉を信用すればその頃パルフィはスタンダールを意識して愛し始めていた。また、情情に流れるまま例のペレイテルと同棲していた。此の頃、ミラノで発想を得た仕事に取りかかってもいた。1811年12月4日に緑の表紙をしている分厚いノートの第一頁に〈アンジェラのために〉と記していた。その仕事とはミケランジェロの伝記を書くことであった。1812年の5月なかばまでこの仕事に励んでいた。次いで6月20日から7月1日までルイ・クローゼと共に文体の訂正を続

けた。

カドール公の親切な後立でスタンダールは皇帝とパリ内閣の重要書類を運ぶ法務官の一人に任命された。

7月14日、妹ポリースに23日ヴィルナに向けてパリを出立つするだろうと便りしている。8月24日にモレンスクからフォールに手紙の返事を出している。

《私は12日間かかってくる君の手紙を受け取りました。パリからわれわれの所にやってくるのには八百哩も離れていましたのに。君はとても幸福でいらっしやる。君がこれはいけると思っておられる考えに忠告しようなどとは思いません。好機にモンテスキューの出版を始めようとお考えですね。私の考えはここにあっては貧弱なもので御座居ます。人間はかくも変わるものでしょうか。かつてはあれほど見たかった渴望も今ではすっかり消えようとして居ります。ミラノやイタリア各地を見てきた私はここでの全てにその愚劣さから失望して居ります。……もっと長い手紙を私に下さい。八百哩に価するにしては君の手紙は短かすぎます。アンジェラにも私に便りするように進めてくれませんか。》

直接、戦いそのものに参加することのなかった彼はそれだけ戦争が如何に馬鹿馬鹿しいものかを充分に見ることができた。かくして消極的反戦思想にとりつかれて苦しみ、40歳で死ぬことが確実であったところで躊躇したりすることはしないだろうと、人生そのものにさえ絶望し、風の吹くままに戦場を逍遙する。1812年8月28日の日記を読むと、モスコーまで60里の戦塵でまみれた小さな森で昨夜の9時から野営している。そして、彼は自己反省に落ちヴィルナからずっと頭にあることだが軍隊の悲惨さを感じたと告白している。

ここでわれわれはナポレオンのモスコー遠征時に至るまでのヨーロッパ状勢に就いて少々歴史的見地で見よう。スタンダール自身マレンゴ戦を機としてナポレオンの軍事行動の殆んどを今まで追従してきたのであるが、し

かし、彼はまだまだ弱年のゆえか日記や手紙から判断してヨーロッパ状勢に関する優れた視野を示したとは思えない。その渦中にあった彼は正確な判断をするためには余りにも感情に走り、せいぜい人間に関する認識を深める程度のものであった。『赤と黒』、及び、『リュシアン・ルウヴェン』でジュリアンなり、ルウヴェンはいずれもレナール夫人やシャトレール夫人によって社会教育を受けている。こうした作者の描写は現実の人、スタンダール自身の青年像をわれわれに想起させる可能性を与えよう。此の頃の彼の教育係はバルフィであった。と。スタンダールの口癖の一つである私はまだ英智の人になっていなかったという言葉をここに引用しておこう。けれども、時々運命は皮肉を使用する。ナポレオンの失墜はスタンダールを遂に英智の人とするであろう。そして、その証人にダリュ伯がなるであろう。

ナポレオンは半島戦争後、エルンフルトに会議を開催させたが思うような外交的効果は得られなかった。この1808年9月から10月にかけてナポレオンとゲーテが会見するという一幕があった。1810年から1812年、要するにティルジット条約、ベルリン条約に於いてナポレオン帝政は全盛期に達し、その勢力はベルギー、オランダ、ドイツ西部、イタリアの一部、アドリア海沿岸にまで及び、西南ドイツのライン同盟を統率し、スペイン、ナポリ、ワルシャワと殆んどロシアとイギリスを除き全ヨーロッパに誇ったのであるが、ヨーロッパ大陸体制はその規定する生産流通組織に反撥を始めプロシヤに代表される近代的改革、及び、それを支持する国民的覚醒はナポレオンの独裁を脅やかしていった。しかも、上述の半島戦争を契機とする民族解放運動に於いてフランス軍に敵対するものはもはや封建的軍隊ではなかった。然るに始め彼の地位は大革命の自由、平等の伝播者として迎えられたところに支柱を得ていたのであるが、帝王となるに至って我儘な私的行為が多くなり、一門の栄達のためにフランスの利益を無視するに至って人気が下降する。一方、ナポレオンの軍事力は過度の徴兵、及び、徴税によって底をつき、1811年には戦時インフレーションによる経済危機は国民生活を低下させた。このよう

な状勢のもとで1812年のモスコー遠征は計画された。と言うのもロシアは当時フランスとオーストリアの接近によって不安を感じフランスの支配から離脱を謀ったからである。それでナポレオンはフランス軍約20万、同盟軍約50万の大陸軍を編成して遠征の途についた。

スタンダールが9月14日にモスコーへ入城した時、そこでどんな光景が展開されていたのであろうか。彼が14日から15日にかけて書いた日記があり、それを10月4日にフェリックス・フォールに書簡として送っている。

《アブラクシース宮で夕食中の我が閣下を置いてきぼりにして、その足で宮中にいるダリュ伯に別れの挨拶に行った際、数時間前から焼え続けている中国風の都の大火がごく自分たちの近くに迫っているのに気づきました。激しく焼えていたのです。この探険の最中私は歯痛で弱りました。私たちは一人の兵士を逮捕する善行をしました。彼はビールを飲んでいて男を銃剣で二突くれたばかりだったのです。瞬間、エペを抜くところでした。このならず者を突こうとしたのです。

大火は致る所でおとろえていったので一時頃に引き返しました。少なくともわれわれの目には大した結果にはなるまいと思えたので御座居ます。……とあるクラブに面した大通り上に車を並べて置いたのですが、そこでB夫人を発見しました。彼女は私の足下に身を投んとしていた。そんなわけで非常に見せもの的な再会となった。B夫人が私に語ったすべてには自然らしさの片鱗すらなかったことに気がつきました。当然、その印象は私をぞっとさせた程です。でも彼女のためにずい分尽くしてやったのです。太った義妹を私の車に乗せて彼女たちの車を私の車の後に置いてやりました。彼女は私にサン・アルブ夫人（メラニーは1806年にフランス座でサン・アルブ夫人という名でデビューしたのである。）があなたのことをよく話していたものです。と、語った。大火が自分たちが去ったばかりの家へ急速に近づいていった。大通りに車を五つ六つとどめ置くことになりました。無為に飽きた私は火災を見にゆき、ジョワンビルの所で一、二時間たちよってすごした。彼がもの



にした調度品にとても慾望を覚えた。そして、ジレやバイシュと一緒にワイン3本をからにしてやっと生き返った次第です。この私はそこでヴィルジニーの英訳の数行を読んでいた。愚劣さに囲まれているなかでのこの読書は私に幾分精神的生命を復活させた。ジョワンビルと一緒に火事を見に行った。酔って馬に乗っている砲兵将校のサヴワイエなる者が巡回士官に悪口を浴びせながら一向きまらない幾突きかをふるっているのに出会った。奴が間違っている。それで、遂に士官に仕方なく許しを乞う始末になった。盗み仲間の一人が焼えている通りにめり込んでしまった。多分、奴は丸焼けになったでしょう。このように私は一般的に見たフランス人の性格に関する弱冠の新しい証拠を見たのです。ジョワンビルは巡回士官に味方してこの男を落ちつかせようと楽しんでいました。……私はと言えば巡回士官の忍耐に感心して居りました。それで、サヴワイエの鼻面にエペの一撃をくれるところでした。もっともそんなことをすれば、大佐と一悶着起したでしょう。ともかく士官はたいへん分別のある振舞をしました。3時に私は悲惨なわれわれの車の行列に戻りました。隣りあった木製の家で粉と燕麦の倉庫が発見されました。召使いたちに取りってくるように命じましたところ、連中はとても興味を見せて沢山取ってくる積りでしたが、結果はほんの僅かでした。このように連中は致る所で群をなして行動するので次第に苛だってくるのです。馬鹿な奴らと思っただってどうしようもありません。いつも哀れっぽく叫びまくるので遂に我慢できなくなります。そんなわけで不幸な毎日を送って居ります。他の人よりは幾らか我慢している方ですが、しかし、不幸なことには怒りばいのです。……3時半にジレと私はピエール・ソルチコフ伯の邸を調査して居りました。この邸はS、Eにはもってこいだと思えた。このことを報告するためにクラムランに行き、デュマ將軍の所に留まって居ました。彼はその地区を管理していたのです。キルデュネル將軍がジレと私を前にして、（若し私に四千人を与えてくれるならば6時間以内で火を消して見せる。）と、語った。この言葉は私を驚かせました。私は成功を疑うものです。ロストブチーヌ

は火を絶えず放たせていたのですから。右の火災を消したと思ったら、今度は左に火を、要するに致る所で火を見るでしょう。クラムランからダリュ伯と親切なマリネールの所に行き、兩人をソルチコフ邸に導いたのですが、ダリュ伯はこの邸では不適合であると言い、クラブのある方に他の邸を見に行く約束を貰って居ました。フランス風に飾られた威厳のあるくすんだクラブを見つけたものです。この様式にせよ、パリにあるものとは比べ物になりません。クラブの後に隣りあった広い立派な邸を見つけました。つまり、白っぽい、四角の美しい邸です。われわれはここを占める決心をしました。われわれはとても疲れて、特に私は他の連中より参って居りました。スモレンスク以来すっかり力が失せた感じがします。子供扱いとお笑いでしょうが私はこの邸探しに興味と探求にかられたことです。興味と言えば言い過ぎならせよと探したと言いましょ。遂にこれに決め移り始めたことです。芸術を愛好した裕福な人がこの家に住んでいたようです。沢山の彫像や絵が適当に配置されていました。沢山の書物も、殊にここにはあちこちにデュフォンやヴォルテールのものが。……ワインの不足からひどい下痢になるのを怖れていました。われわれは素晴らしい情報を得たのです。私が話した例の立派なクラブの地下室からワインを持ちだせたと言うのです。そこでジレ親父にゆかせることにしました。……その穴倉へ皆が召使いたちを投げ込んでいた。……召使いたちは家を整理続けて居りましたし、一方、大火はわれわれから遠く離れて大気を空高く赤銅色の煙で染めあげていたので御座居ます。ダリュ伯が帰って来てわれわれは出発しなければならないと、告げたとき、邸の整理を終り、やっと一息つこうとした折でした。……その邸を離れる際に、なかに入り、ヴォルテールの一巻を失敬した。……7時になってやっと出発したのです。ダリュ伯が怒っているのに出会いました。ある大通りに沿って大火の方へ真直ぐに進み、だんだん煙りのなかへ入り始めていたので、呼吸が困難になった。遂にわれわれは壊れた家々のなかへ突込んでしまった。命令と分別がまったく無くなってしまったのでわれわれのあらゆる行動はかっ

でない程危険な様相を示しています。ここで夥しい車の行列が災を避けようとしてその真中に突込んでしまったので御座居ます。この行動は町の中心が火の輪で囲まれていただけに非常識なものであった筈です。そんなことは問題となることじゃなかった。火は町を占めているのだから町を出る必要があったのです。それ以上に進めないことがはっきりしたので廻れ右した。……戻りつつある時、路上でキルヂェネル將軍に会った。この日、私はとても彼に感謝していました。彼は気をきかして都から出るためには三つ四つの道があることを思い出させてくれた。われわれは11時頃にそのなかの一つをたどり始めた。ナポリ王の駆者たちと議論しながら兵隊たちの列を横切った。われわれがチニヴェルスコイかチュヴェール街をたどっていることにやっと私は気づきました。この比類のない見事な火災のために浮きでている町から脱出したものです。》

スタンダールに青春の真の開花を果したメラニーはロシヤの將軍バルコフの夫人となっていたのである。当然、モスコーに彼女は居た筈であった。上述の手紙からもそのことが推定される。実の所、彼はモスコーに着いて暇になるとメラニーを見つけるために焼跡をくまなく探し廻ったが会えなかった。三日、四日過ぎて始めてオギスト・フェセルと言う人から次のことを知ったという。それは、彼女がナポレオン入城の二、三日前に聖ペテルスブルグへその夫と共に困惑しながら向ったと言うのである。夫というのが、情は深かったが同時にたいへん嫉妬深い小さな酷い男であった。と。さらにフェセルはこうも付け加えている。夫人の方はフランスに戻るための十分な余裕を持っていたが夫は金持ちでもなかった。と。スタンダールは以上の情報をパリの公証人であるルス氏に宛てた書簡（1812年10月15日モスコーにて）で伝えている。そして、スタンダールはかつての夢を懐しんでかひよっとしたらと希望を持ち、メラニーのために若し彼女がパリへ帰ったらパリの自分のアパートを使用させて下さいとも書いている。

1812年10月16日、モスコーからダリュ伯爵夫人に宛てた手紙によると、彼

はモスクーの諸宮殿の様子を画いている。例えば、パリでは知られていないが、イタリア風に魅力ある感覚でもって飾られた四百から五百の宮殿がある。そこにいた八百人から千人の延臣は五千から十五万リーブルの年金を取っていたが、この不運な連中は快樂にしか興味を持っていなかったのです。しかし、この連中をわれわれは町から荒地へ追払った。と、述べている。さらに、自分たちの会話はあなたには想像もつかない程愚劣なものと語りわれわれはポロニユの宿以来まだ女性を見かけなかった。けれども、史上稀なる大火に就いては偉大なる認識者となりました。と、語った。そして、手紙の最後に始めてパルフィに対する恋情が仄めかされているように思える。

《気晴らしさを求めて旅立った私でしたのに何も気晴らしになるものは見つかりませんでした。そして、私は相変らずフランスのことを考えています。》

先述の8月24日のフェリックス・フォールに宛てた書簡の結びにパリにいたときのようにパリをもはや好んでいませんと、書いた彼がフランスという意味は、すなわち、パルフィであった気がする。それは相変らずあなたを思い続けているという告白となろう。従って、此の頃パルフィに宛てた手紙は多い。1812年11月9日スモレンスクよりダリュ伯爵夫人に、

《また、この美しいスモレンスクへやって参りました。今度は少々雪によってそこなわれています。ここ迄モスクーから感情的な旅をしてきました。この旅の話をさせて下さいませ。この旅程平凡なものは比類がありません。あらかじめ周囲の事情から予見されてはいたことですけれども……日に三、四度、私は極度の倦怠から快樂へと移ります。この楽しみはデリケートなものではないことを告白しなければなりません。例えて申しますと、その最たるものの一つが、ある夕方、幾つかのジャガイモを探して弾薬のような<sup>カビ</sup>の生えたパンと塩も味もなく喰べることですからね。このわれわれのひどい窮状を御想像下さい。こんな状態が18日も続いたのですからね。すなわち、モスクーを10月16日に出て11月2日にここへたどり着きました。デュマ伯爵

が千五百人の負傷兵からなる一団と私に出発せよと、命令しました。二、三百人の兵士に護衛されていました。互に擦り切れながら泥の深みに落ちつつ呪いと果しない議論で埋まっているちっぽけな車の行列を御想像下さい。毎日、あらゆる欠乏に悩みながら、きまって泥の流れを二、三時間は渡るので御座居ます。そんな時こそロシアへやって来る気を起したなんて、と、呪うのです。……10月24日、祭りでもしているかのように、われわれは一団の連中に取り囲まれ、彼等は発砲して来ました。徹底した不秩序と負傷者の叫びのために負傷兵に鉄砲を取らせるのにたいへん苦痛をなめました。われわれは敵を押し返しましたが大きな危険にさらされていることを自覚して居ます。一人の傷を負っている勇敢な男でムウニエと呼ばれる将軍がわれわれに状況を説明してくれる。夕方、コサクに攻撃され、われわれの眼前に四千ないし五千の正規兵とバルチザンから成っていたロシア軍がいたらしい。包囲されてしまい進退窮まったという状態におかれました。そこで夜歩いて進むことに決めました。若し進めたならば車を捨て、四角の戦闘隊形を取りながら刀の餌食になり、あるいは、他の愛すべきあらゆる手段によって一撃してくるであろうバルチザンの捕虜となるよりは、むしろ最後の一人まで討死するのだと決心を固めた次第です。この見事な決心のあとでわれわれは身辺の整理をしました。一週間前はまったく面識のなかった五、六人の傷ついている大佐連中と私は組んで居ました。……》

1812年12月7日、ヴィルナから今度は妹に便りを出し、此の日にケニヒベルグへ向っている。そこで、一週間滞在したあとで12月30日にベルリンへ向っている。1月23日ベルリンを慌だしく出発する直前妹ポリーヌに短い手紙を出している。

《私が30歳になったこの日にベルリンを出発するのです。この出立はなんとと言っても子供のように嬉しい。……》

そして、フランスへ戻るといふ気持ちがそうさせるのかスタンドールは自分が30歳になったということはかって愛したヴィクトリーヌもまた30歳になっ



ただと回想している。さらに妹にも〈お前も27歳になったかしら〉と問いかけて、急いで享楽に耽けるべきじゃないかと自分の本心を打ち明けてもいる。このような彼の処世観は『赤と黒』でピラール帥がラ・モール侯に堂々と、〈この年になってもわしは楽しみというものを重んじるのでな。〉と、言われて仰天したり、『リュシアン・ルウヴェン』で、リュシアンが親父の女をお守りしたりしているようにスタンダールの作中人物が持つ人生観ともなっている。

サガンで6月10日から7月26日まで滞在したが、経理官の職にあったスタンダールは病気の養生と称してミラノへ逃避してしまった。

次が1813年9月7日の日記である。

《今朝10時にミラノの町が見えた時、イタリア旅行が私をいっそう独創的に培い自分らしくすると思った。豊かな知識をもとに幸福を探求していることも認める。汝の関心は生きることにあるのか、それとも自己の生活を書くことにあるのか、日記をつけることが偉大に生きる助けとなり得るだけにこの日記をつけるにしくはない。》

9月16日から20日までコモ湖畔に滞在している。アンヂェラとの湖上の趙遊は一日中楽しいものにした。21日の夕、モンザで彼女と別れている。同じ月の25日、アンヂェラからの便りを待っているために仕事もできないでいる。と、日記に書き、続けて〈待つ男の辛い立場にいる〉などと称しているが、結局、待ちぼうけを喰ったのみであった。

1813年11月30日、スタンダールはドフィネーから妹夫妻と一緒にパリへやって来ている。このとき、彼は軍人になることで立身出世しようとする夢を捨ててしまっていた。そうした彼に執って戦いのあいだも研究し続けた文学に対する情熱が復活する。そんな彼には日が長い。そこで彼はシェイクスピアを読み耽り、音楽会に出かける。

背を見せたナポレオンに対して敵は同盟してフランス侵入の機会を狙っていた。スタンダールはカドル公を通じて皇帝に兵籍登録除外を願い出て許

されていたが、しかし、12月26日には復職し、法務官として元老院のサン・ヴァイエ伯に加わり、国家防衛の目的から第七大隊を強化する任務を帯たのである。そこで12月31日の3時に妹夫婦と共にドフィネーに向ったのである。明けて1月にはピエール伯がサン・ヴァイエ伯に徒弟をよろしく頼むと便りしている。

1814年1月5日に伯と部下のスタンドールはグルノーブルに到着し、翌日から国家防衛軍を組織し始め、その司令官としてマルシャン將軍を迎えたのであり、このように両人は任務遂行に励んでいた。ダリュ伯の体面を重んじてか、それとも故郷で仕事をしているせい、ともかく、スタンドールは任務に果命に従事したのであまり健康に優れなくなった。1月の終りにサン・ヴァイエ伯は大臣に次のように報告している。

《私はベェル氏に満足しております。彼はよく働きます。しかし、彼の体力では仕事に堪えられません。》

また、伯は同時にスタンドールのために勲章を求めていた。一方、スタンドール自身もあらゆる機会に自分の奉仕と、その熱心さは報酬として勲章に値すると仄めかしたらしい。だが政局の急変のためか貰う機会がなかった。1817年になってさえも彼はまだこの時の不満をこぼしている。

《私は勲章を貰っていない。私には貰うだけの権利があるのに。ただ、そのことだけが三年前の私の激しい野心を支えていたのである。》

1814年初頭の戦線はどのように展開していたであろうか。当時、反フランス軍はサヴワの一部に侵入し、シャンベリ、エシエル地方、及び、モントメリアンを占領していたがフランスはモンブラン軍団を統帥しているドセイ將軍の力でこの三地方を奪回したのみならず、エックス、アンヌーシィ、及び、エクリューズ要塞も取りかえたのであった。

此の間、サン・ヴァイエ伯とスタンドールはバロー要塞を視察し、2月28日にはシャンベリに足跡を残している。彼は上司の書簡にある通り実によく働いたので持病とも言える熱病に罹り、保養のため伯と別れた。3月14日、

シャンペリを出てパリに向う。18日にクローゼと一緒に、27日にパリへ到着している。戦局は最大に悪化し、3月30日ロシア軍はモンマルトルを占領した。

此の一日前の29日にはポン・ロワリアルで彼とクローゼは時刻を見計らって彼もかつて真近で拝顔の榮譽を受けた皇后とローマ王が乗った馬車が遠ざかるのを見送っていた。人々はなんの感動も示さなかったという。皇帝の大臣連の無能力や卑劣な行為はスタンダードルに嘔吐を催させるものであった。

《私はごく近くに一つのとてつもない見せ物を見ました。最近にない簡潔さで万事が行われていた。自分の利益のためにそれが何んであるかを知ることなく大きな奴も小さな奴も狂奔しているのです。》

と、スタンダードルは妹ポリースに1814年4月15日の手紙で述べている。しかし、注目すべきはスタンダードル自身が、多分、生活のためであろうが他者に劣らずそうした一人であったのである。すなわち、彼はモントールに元老院、及び、臨時政府の諸々の行為、それにブルボン朝の再建にも同意すると発表したのであるが、その同じ4月12日号でナポレオン皇帝の退位が公布されているのである。

ジュリアンの背に近き未来に於ける革命の際ダントンを夢見るマチルドを適当にあしらいながら、革命なんかあるものかと冷静な自嘲を浮べるあのジュリアンの経験を彼は体験していたのである。

一方、彼の保護者ピエール・ダリュ伯は復職しようと運動していた。ナポレオンの下で勤務した職と同じ職に就けるなどと甘い見通しを持てる彼ではなかったのである。若し、スタンダードルが依頼しようとするればブルボン王朝への橋渡し役を演じた臨時政府の権力者の一人ブーニョ伯であった筈である。事実、スタンダードルは伯が自分をフロレンス公使館員に任命してくれると期待したがむなしかった。生活資金を作るために持ち馬まで売らねばならなかった。それほど惨めな境遇に落ち込んだスタンダードルは音楽や創作に逃避するのである。モスクー退却に際して『イタリア絵画史』の草稿の一部分

を〈コサックに喰われた〉彼はそれを生活費と換えることはできなくなっていた。そこで『絵画史』に代るものを早速創作することになる。この生活の糧は一石二鳥の精神の糧ともなった筈である。6月30日の日記に、

《5月18日以来（ハイドン）、メタスタジオ、及び、モーツァルトの仕事をやっている。この仕事を仕上げるのはとても嬉しい。ドリュエ氏が私をフロレンスの公使館付書記官に任命してくれない悲しみもすっかり紛れる。》とある。

このような八方塞りの状況にあって彼は本気でパリと比較して生活費も安く、社交界生活も楽しめるナポリかミラノへ引退しようと考えだしていた。そして7月3日になると何時でも出発できるようにホテル住いを始めた。

ルイ十八世に仕えることに就いては後年にそうであった如く、自由主義者と看做されていたわけでもないのに、彼さえその気になり時間のかかる奔走に堪えれば何んとか職にもありつけたのであろうが、彼には忍耐が欠けていたし、それにアンジェラのいるイタリアへの魅惑は募るばかりであった。

スタンダールは出発を急ぎ、ブーニョ伯爵夫人を失望させることになる。1814年8月10日にミラノに着いた彼は8月28日に夫人に次の書簡を送った。

#### 《夫人

私がパリを離れて一か月、多分、多くの事件があったのでありましょう。ありうることと思いますが、あなたは一旅行者の話になんか、僅かの注意もお払いにならないと存じます。キュリアル夫人（ブーニョ夫人の娘で10年後のスタンダールの恋人）邸で私のこの手紙を見つけられることでしょう。私にはキュリアル夫人は魅力のあるお方に思います。……私は旅行中にできた友だちをたいへん好きになっています。この連中はあなたに何か心地良いものを認めてくれるにちがいありません。あなたがどんな女性であるかを知ることなく愛しているのですからね。トリノでイタリア人のある将軍と知りあいになったのですが、恐ろしく、その人の名を知ることはできません。彼は私に大公を紹介し、さらに、有難いことには18歳になる可愛い女優をも紹介

してくれました。たとえようのない美しい目をしており、生活を快活にし、恰も自分の家にいるかの如く舞台であらゆる人々を嘲笑します。それに、本当に賢い女で金持と結婚しようと思っておられません。これらの金持たちは彼女に華やかな幌附四輪馬車の目録や連中の社会の倦怠を送ると申しでるのですが。たいへん素直な彼女の気質は非常にまれな態度、すなわち、まったく自然な振舞いで歌い演ずることから由来するのでしょう。観客のすべてが10分間というもの目に涙をためて笑っているのを見ました。人々はハンカチを使います。そして、ハネと喜劇の二重唱を口ずさみながら帰ります。その歌は彼女がおどけた愛人と歌っていたものです。そこにこそアルプスの反対側では見られない楽しみがあるので御座居ます。フランスではこの無作法な二重唱に反対するのでしょうか。……

それゆえ、ミラノのある婦人（アンジェラ）とかわすれ話はとどまるところ知らずです。ミラノ社交界はフランス人に嫉妬深いのです。自然用心深くなります。そのために彼女はジェノアに私を追放したところです。8月31日までその地に滞在することになるであります。いつ迄でしょうか。私には分かりません。この国の人々がフランス人に対して抱いている憎悪の判官となることは私にはできません。なぜならフランス人は丁重に迎えられる。そして、そうした憎悪を私にでなく彼女にのみ示すのですからね。こんな所から私は疑いを持ちますし、絶えず彼女の言葉を信じているわけではありません。そこで彼女の言分に逆らってしまうので御座居ます。お定まりの涙を流す争いとなります。遂に出発することに同意する破目となったので嫉妬に苦しみながらミラノを去ろうとしているのです。私は彼女にヴェニス、あるいは、彼女が望む都市であれば大きかろうと、小さかろうと、どこかの都市で生活しようと提案したものです。そのことに就いてゼノアにいる私に決心を知らせてくれる筈です。彼女は私に彼女の肖像を求めさせました。この手紙を書いているあいだに私のところに書物のあいだに挟んで届けられたばかりです。



夫人よ、さよなら。便りを続けたいのですがどうしても止めなければなりません。》

さて、この手紙にも語られているアンジェラとスタンドールのその後の模様を眺めておこう。1800年ナポレオンのイタリア遠征にスタンドールが参加したとき、彼の仲間ルイ・ジョアンヴィルの情婦であったアンジェラは当時すら多数の男友だちを持っていたし、彼女の夫は根性まで商人になり切った男で妻にまつわる連中を取引の対象としての金になる奴のみは見ても見ぬふりをしていたと言われている。11年間、脳裡に画いたアンジェラ像はル・シッドのように美しいという範疇にあって形成され、二人の出会いはいくなくとも当初はロマンチックな様相を帯びていた。スタンドールはバルコニーで〈間もなくマントヴァの野に屍となりたい〉あなたと結ばれるならと、恋心を打ちあげたとか。

一方、アンジェラも彼に11年間も想われた恋人の如く調子を合せていたのであった。しかしながら、1815年末に両者の関係は終りを告げるのであるけれども、スタンドールはアンジェラを識ってから4年目の1814年5月23日の日記で彼女が必ずしも自分が理想として画いた女性ではなかったと告白するにいたっている。

彼は1814年8月29日にアンジェラとの約束を守ってミラノを出立し、同月31日にゼノアに到着していた。そこで9月18日まで滞在している。次いでフロレンスで13日間滞在したあとで10月13日にミラノへ帰っている。10月16日、スタンドールは覚え書きに、〈彼女は私にわれわれの仲の解消を宣言する。〉と記してその日記には次の如くアンジェラの言葉を書きとめている。

《彼女はお手紙を下さることもなく15日間もゼノアに居らしたのですから私たちの仲は終わったのですわ。と、私に言った。》

1815年1月14日、トリノにて妹ポリヌに宛てた手紙を引用しておく。

《若しあんたが愛人を持つような時、二人のあいだに争いが起こる場合ほど、自分の本心を偽っていけないことが分るでしょう。ヒル（アンジェラの

夫のこと)の嫉妬がかつしているのです、シモネッタ(アンジェラ)夫人は私に姿を隠すべきですと提案しました。そして、こう付け加えました。彼女はモスコウの征服者は寒さを怖れないわね。今、イタリアはキュラロまでしか進めないのですから、そこを一廻りして頂かねばなりません。そうして頂くことが私たちの別れを免れることになる筈ですわ。私たちがヴェニスで住居をかまえる場合にはね。私は抗議しようとしたのですが、無駄でした。それで、トリノに来ているのです。しかし、男たちが恋人と踊っている輝やかない魅惑の舞踊室から外に出て、どんよりした空の下、道を歩き、汚い物のつまっている穴に落ち込んだりするなどの映像は、若しあの平凡なキュラロ故、この愛すべきイタリアを去る際に経験する筈の傷ましい映像でしかありません。あんたは覚えていると思いますが、一年前、われわれはその地で苦るしんだのですものね。それで、私はトリノに留まったのです。此の23日に私は帰路に着き、セニス山の雪に呑みこまれなかったと、シモネッタ伯爵夫人に手紙を出すでしょう。……》

スタンダールはこの14日ひどく気が弱くなっていた。と言うのはパリで1月6日にダリュ伯爵夫人が亡くなったことを知ったからであった。すでにわれわれが知っている如く長年にわたって彼の真の母の如く彼を保護してくれた彼女がこの世の人ではなくなったのである。過去の追想がスタンダールを打ちくだいたに違いない。アンジェラが目茶苦茶言ってもただ首肯だけであったであろう。上述の手紙の未行に、

《……人が持ってきた新聞は私に執って何んという恐ろしい知らせなのでしょう/ダリュ夫人が亡くなったのです。あんたに次いでこの世に持っている最良のお友だちでしたのに。あんたに書く力もありません。さよなら。》

1月25日、トリノを発って27日ミラノへ戻っている。そこで失うよりはましとアンジェラの言うがままになりながら7月12日まで暮す筈である。

スタンダールは後年20歳も年下のメリメに彼女との別離を語った。メリメは『スタンダールの追想』でわれわれに語ってくれる。

《逢引が許るされると、ペールは自分の後をつけてくる者がうぢやうぢやうと思っていたのでその連中をまくために幾度も馬車をかえてしのび姿でかけるのであった。やがて、日がとっぷり暮れると灰色のマントに身を包んで、絶対秘密を洩らす心配のない小間使に案内されて恋人の部屋に通されるのであった。しばらくはこうして全てが上手に運んだのであるが、終いにはこの召使いが主人と仲たがいのしたのか、ペール（スタンダール）の気前の良さで買収されたのかは知らないが、とにかく寝耳に水の驚くべき事実を彼に打ちあけた。つまり、旦那様は焼餅やきでなく奥様があれほど秘密にきなさいと、おっしゃるのもペールさんが他の恋敵というより他の情人たちと鉢合せしないようにというため、事実、奥様には幾人も男があるので。その証拠をお目に掛けましょう。と、言ったのです。彼は承知して、ある日、約束でない日にやって来て、小間使いから小さな部屋に隠して貰い壁にあけた穴から裏切り行為が自分の鼻先で行われているのをまざまざと見た。ペールはその話を続けた。「多分、私がその小さな部屋から飛びだして二人を刺し殺そうとしたと思うであろうが、全然そうではないのだ。何か滑稽極まりない芝居でも見ている気がしたので、この秘事をぶちこわしてはならないと思って吹きだしたくなるのを堪えることばかりに一生懸命だった。私はこの暗い部屋に入ったときと同様にそっと出たのさ。この光景がおかしくておかしくて独り笑いながら出て来たのさ。要するにこの女は見下げ果てた奴と思ったし、こうしてやっと元の自由な身になれたのがなにしろ有難い話だからね。……帰るといつものように寝たのさ。ところが翌朝になると、暗い部屋で見た光景が滑稽とは思えなくなっている。なにか忌しい汚らしい感じなんだね。それから日毎に益々嫌な目をそむけたくなるような光景として目に浮ぶようになった。一年半、気が抜けたようになって何かをやる気力もなく、ものを書き喋る、考えることもできない状態が続いた。自分の蒙った打撃がどの程度かはっきり分らなかったのだが、とにかく、耐え難い不幸に見舞われた気がした。すっかり気力を奪ってしまったのだから、こ

んな大きな不幸はないわけさ。その後、このひどいスランプから多少恢復すると今までどんな不実を働いていたのかすっかり探ってやろうと、妙な好気心を起した。それは私もずい分辛かった。しかし、彼女（アンヂェラ）が色々な裏切り行為をやっていると思うと、ある種の肉体的な喜びも感じたね。復讐してやったがその仕方は愚劣であった。唯、彼女を嘲けただけなのだからね。縁を切ると言うと、彼女はひどく悲しんでね。泣いて許してくれと言ったのだが、私はつまらない自尊心からさも浅ましい奴と言わんばかりに振り払った。すると、今でもあの時の姿が目に残っているが彼女は私の服に追いつがって跪まずいたまま、長い廊下を出てゆく私に引きづられて来たのさ。許さなかったなんて馬鹿だったよ。確かにあの日ほど私に愛情を見せてくれたことは一度もなかったのだからね。》

このようにしてアンヂェラとの破綻を招いた以後の丸2年メリメの証言、すなわち、スタンダールはいつも恋をしていた。とあるにも拘わらず現在にいたるもわれわれに知られている恋と名付くべきアヴァンチュールは見当らない。スタンダールは文学作品の創造に非常に楽しみを感じ、スカラ座で観劇しつつ夢想する。しかし、健康はすぐれず絶えず気憂になり神学校に入学したジュリアンがそうであったようにぶっ倒れたい感覚に苦しんだという。

1816年の3月末、スタンダールはグルノーブルに帰ろうと決心していた。4月にグルノーブルに着いている。彼にはボンヌ街に持ち家があった。父から1812年6月25日に相続したものである。しかし、その手続きは容易なことではなかった。この不動産は四万五千フランの抵当に入れてあったからである。彼自身が父より譲渡の著名の際、父に払うために借金をしていたからである。この家庭事状を清算する目的で生家に戻ってきたのである。此の間、妹の一人ゼナイードは従弟のアレクサンドルと結婚しており、また、父の胸には例のアルトワ伯の尽力によって貰えたレジオン・ドヌール勲章が輝いていたが家の財産は光を失っていた。疑いなく父シェリバンはすっかりブルボン朝に盲従していた。共和主義者がかった息子スタンダールに執っては生家

はまったく面白くもないものとなったのである。故郷からの帰途のことであるが、アンジェラとの恋の終着駅に近い1815年の初めに、14年の春から夏にかけて執筆していた音楽書が上梓されるのであるが、その題名は『オーストリアのウィーンで書かれた。有名な作曲家ハイドンに関する手紙付、モーツァルト伝、メタスタジオ、及び、フランス、イタリアに於ける音楽会の現状に就いての諸考察』という長名を有していたが、しかし、16年秋にこのハイドンに関する部分はその4年前にイタリアの音楽評論家ジュゼッペ・カルパニの『ハイドン伝、あるいは有名な作曲家ハイドンの生涯と作品に関する書簡』を要領よく抜き書きしているというので16年9月23日にカルパニ氏はサリエリ、及び、ウィグルなどと連名で『立憲新聞』に激しい抗議を掲載するという事件が起きた。そこで、スタンドールは9月26日にルアンから『立憲新聞』に書簡を送り彼等の排戦に応じている。書簡の大略は以下の通りである。先づ書き始めに私の兄セザール・ボンベ氏（スタンドールの本の著名はセザール・ボンベとなっていた。）に代って答えるものであると断っているが、勿論、虚言でスタンドール本人のことである。それから、ヒュームとラクトルの例を挙げてわれわれの場合も同様であるとしている。カルパニ氏はボンベ氏に対して決定的証拠を提出して見せると言っているけれどもその証拠とて両者ともまったく同じものであるのか、それとも偶然の一致である場合もある。それを知る方法は簡単である。カルパニ氏は氏自身の著作『ハイドン』から30頁を訳すこと、氏自ら撰んで結構であること、そして、ボンベ氏の『ハイドンに宛てた書簡』から前著に照応する30頁を掲載すること、そして、後者の30頁をカルパニ氏自身撰ばれるが良い。そうすれば、読者が判決を下すであります。若し、他の証拠が必要ならば、ディドで印刷されたボンベ氏の著作は、ハイドンに関しては250頁に過ぎないのに、カルパニ氏の方は、約550頁もある。なお、私はカルパニ氏に次の如く問うでしょう。氏が同様にモーツァルトの生涯、メタスタジオに就いての優れた文学的逸脱、イタリア、及び、フランスに於ける音楽の現状に対する書簡、及び、理



想美に関するモンモラシイの書簡などに就いても権利要求されるかどうか…  
…。

かくして、両者のあいだに9月から10月にかけて同誌上で5度にわたって真偽論争があった。著者の弟と名乗っていたのに抱らず17年8月2日の『イタリア絵画史』から作者の正体がばれる。

(続く)